
タバサと日本に帰ってきた

神崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タバサと日本に帰ってきた

【Nコード】

N1318K

【作者名】

神崎

【あらすじ】

みんなに見送られながら世界扉を抜けてハルケギニアから日本に帰ってきた才人。出てきた場所は見慣れた光景。そして少し遅れて降ってきたのは、別れたはずのタバサだった。

（注）この作品は作者の自己満足で成り立っております。デレデレなタバサを受け付けない、という人は見ないことをオススメします。

プロローグ * 改訂版（前書き）

初作品です。この作品はタバサと才人以外原作キャラはほとんど出てきません。キャラ崩壊を起こすときがあるので、原作通りのタバサ以外認めないという人は見ないことをオススメします。それでもいいという人は是非、楽しんでいってください。

プロローグ * 改訂版

才人がいるのはトリステイン魔法学院にあるヴェストリの広場。ルイズが使えるようになった虚無の魔法、『ワールドトピア世界扉』で元の世界に戻るようになったのだ。そして今日、才人は元いた世界に戻ろうとしている。

「ここに来てから色々あったな……」

そう言う才人から3メートルほど離れた所にいるのは、この一年で見慣れた顔ぶれだった。学院の制服を着て並んでいるタバサ達。今にも泣きそうな水精霊騎士団の面々。女王らしい優雅なドレスを着たアンリエッタ。その隣にたたずむアニエス。拗ねた様な顔を浮かべるイザベラ。まだ少しやつれてはいるが、とても優しい笑みを浮かべたタバサの母親。他にも沢山の人達が、才人と世界扉を見つめていた。

「皆とも今日でお別れなんですな……」

独り言のように呟いた言葉を聞いて、多くの人達の眼から涙がこぼれ始めた。すると才人は、

「わっ！ み、皆泣かないでくれよ。俺は皆と笑顔で別れたいんだからさあ。」

そう言う才人の眼にも涙がたまっていた。すると一人の少女が、

「ほ、ほら！ 泣くんじゃないわよみつともない！ は、早く行っちゃいなさいよー！」

桃色の髪をした背の低い少女。ルイズは涙を見られないように顔を背けて話している。

「ルイズ……。ああ、そうだな。やっぱり泣いちゃうな。今まで世話になったな。本当に感謝してる。ありがとうな。」

そう言っ
てルイズの頭を撫でてやる。そして、ルイズから離れて・

「シエスタ、世話になったな。俺、シエスタが友達で本当に良かった。俺、絶対シエスタのこと忘れない！」

そう言った所で顔を上げたシエスタと目が合った瞬間、シエスタの眼から涙がこぼれ始めた。

「サイトさん。私、サイトさんのこと大好きでしたよ。いなくなるのは悲しいけど、絶対あなたのことを忘れませんから！！」

泣きながらも必死に笑顔を作ろうとしているシエスタを抱きしめて、その場を離れる。それから、並んでいる人達に一言ずつ別れを告げて、最後にキュルケとタバサがいる所まで来た。

「今までありがとなキュルケ。いろんなことあったけど、俺キュルケと友達になれてホントに良かった。」

そう言っ
て、キュルケに手を差しだす。キュルケはその手を握りながら、

「私の方こそ迷惑かけちゃって、ゴメンねサイト。」

そして、キュルケは彼女の後ろに隠れていたタバサを押し出した。

「あっ！」

タバサは慌てたように俺の顔を少し見て、またすぐに俯いてしまった。才人はそんな様子のタバサを抱きしめてやる。

「タバサ。」

そう話しかけると、タバサも背中にも手を回す。

「・・・サイト。」

長い間抱き合っていたが、不意に才人が離れて、

「俺、タバサに会えて良かった。二人でいる時は死んでもいいくらい幸せだったし、今でも別れたくない。俺、やっぱりタバサのこと大好きだ！」

「うん・・・私もサイトが好き・・・大好き!!」

そして才人はタバサにキスをした。二人は離れて、才人は世界扉に、タバサはキュルケの所に歩いて行った。

「俺、みんなに会えてホントに良かった。みんな、また会おうな！必ずだ、じゃあな!!」

そう言って、才人が通った鏡をタバサはじっと見ていた。そして何かを決意し、母親の所に歩みより・・・

「母様、ごめんなさい。私決めました。」

そう言ってタバサを穏やかな顔で見つめたタバサの母は、

「そう。なら、行つてらっしゃい。」

そう言ってタバサの頭を撫でる。少ししたら、タバサはキュルケの方に向き直り、マントを差し出して、

「預かつてて。」

その一言で全て察したキュルケは、

「わかったわ。大切にするわ、行つてらっしゃい。」

そう言ってタバサを抱きしめた。ふっと手を離れたタバサは鏡に向かって走って行った。そして、タバサが鏡を通ったすぐに鏡は消えた。キュルケは鏡をじつと見つめ、

「行つてらっしゃい、タバサ。」

そう呟いた。

帰還、そして再会 * 改訂版

ドサッ！

「イテッ！！イタタ・・・どこだここは？」

着地に失敗し、ぶつけた尻をさすりながら立ち上がり周りを見渡すと、かつて暮らしていた風景が広がっていた。

「帰って来たんだな・・・」

改めて声にすると、急に現実味が増し、どうしようもなく、悲しくなっていた。

「つタバス『なあ、相棒』・・・何だよデルフ？」

いま急に話しかけてきたのは、インテリジェンスソードのデルフリンガー。こっちに戻る際、デルフが『オレっちも連れてけ。』と言われたので、持って来たのだ。しかし、

『どうしてあのガリアの娘っ子を連れて来なかったんだ？ホントは連れて来たかったんだろ？』

「・・・タバサにはタバサの生活があるんだ。俺が口を出していい問題じゃない。あとなデルフ、俺の国じゃお前みたいな剣、持ったら捕まるから、外ではあんまり話しかけんなよ。」

『・・・わかったよ。』

（でも、やっぱりタバサも連れて来たかったなあ。つやべつ、また

涙出てきた。)

しばらくタバサがない悲しさに涙を流していると、

「サイト!!」

「!!?」

急にタバサの声が聞こえた気がした。タバサの声を聞いて安心したのか、涙は止まっていた。

(でも、タバサがいるはずないもんな・・・)

すると、

ドサッ! 「キャッ!!」

1メートルほど上から人が落ちてきた。避けることなど出来るはずもなく、下敷きになって地面に倒れた。

(イテエッ、でも今の声ってまさか・・・)

「・・・サイトなの?」

「!!」

うつ伏せの状態でありながらも、聞こえてきた聞き慣れた声の正体を確かめる為に、首だけを必死に動かして上を見た。

「タバサなのか?」

俺の声を聞いた少女がビクツと反応した。

「サイ・・・ト？ サイト。 サイト！ サイトおー！！」

下にいるのが才人だとわかると、何度も名前を呼びながら抱きついてきた。心なしか瞳が潤んでいるようにも見える。

「ち、ちよつとストップ！一回立とう！」

その一言で少し冷静になったのか、無言で立ち上がるタバサ。才人も立ってタバサと向き合う。

「えと、タバサ・・・だよな？」

「・・・うん（ギュツ）・・・あつ。」

返事を聞いた瞬間、才人はタバサを抱きしめていた。タバサもおずと才人の背中に手を回して抱きしめる。

「タバサだ。 本当に、タバサだ。 夢じゃない・・・」

「サイト・・・」

しばらく抱き合っていたが、才人が少し離れて、

「何でタバサがいるんだ？ここ俺の世界だよな？」

「サイトが通った後、サイトを追いかけて鏡を越えて来た。」

あまりに冷静に答えるタバサにしばらく頭がついていかず、惚けて

いたが、しばらくして現実に戻った才人がタバサに問いかける。

「追って来たって・・・キュルケやお母さんはどうしたんだ？」

「キュルケと母様にも許可をもらってきた。」

「でも・・・」

なおも質問しようとした才人にタバサは、

「追って来て、迷惑だった？」

涙目で見上げてきた。こんな顔をされては才人にはもう何も言えない。完全に才人の負けである。

「いや、嫌じゃないよ・・・ていうか嬉しいと言っかなんと言っか・・・」

そんな話をしていると、急に冷たい風が吹いてきた。凍えるほどではないが、身震いしてようやく外だということを思い出した。「うわっ寒っ！！こんな所にいるのも何だし、移動しようぜ。」

そう言って差し出した手を少し頬を染めながら握ってくるタバサ。思わずニヤけてしまったのは内緒だ。

「そっいや、今って何年なんだ？」

ハルケギニアでは一年経っていたが、こちらではどうか分からない。そんなことを考えていた才人は、

「そついや、これからどうやって呼ぼうか？」

「タバサでいい」

と言ってきた。名前を隠す必要は無いのだが、本人がそれでいいのならそれでいいのだろう。

「分かったよ、タバサ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

改めて呼んだのが少し恥ずかしかったらしい。俯いてしまった。

（可愛いなー・・・じゃなくてー！）

「タバサ、今がいつなのか知りたいから、町の方に行くけど良いか？」

タバサに同意を求める。

「構わない。私はこつちのことは分からないから、あなたに任せる。」

「了解。じゃあ行こうか。」

そう言っただけでまた手を繋いで歩き出した。デルフはばれないように袋に詰めている。他愛無い話をしながら15分ほど歩くと商店街に着いた。周りをキョロキョロ見ながら歩いているタバサが小動物みたいで可愛いかった。そして才人はテレビの天気予報を見て驚いた。そりゃあもう、召喚された時並に驚いた。

「えつと今日は・・・何だって!？」

「どうしたの？」

「俺が召喚された日と同じ日付なんだよ。時間もほとんど経ってない。」

「どういうこと？」

「分からねえ。でも、これで親に無駄な心配を掛けずにすんだよ。」

そのことがただ嬉しくて、つい笑ってしまった。

「でも、これからどうしよう。」

「?家に帰るんじゃないの？」

「それは、そうなんだけどな、タバサのことをどう説明しようかと・・・」

「あ・・・ごめんなさい。」

才人の言っていることが分かったのか、落ち込むタバサ。

「いや、いいんだよ。俺はデルフを持ってるし、タバサは杖を持ってるから、どうにかなるはずだし。」

「うん、ありがとう、サイト。」

話がまとまったので、今度は家に向かって歩き出した。一年経っても道は覚えてるんだなあ、などどうでもいいことを考えていたら、

到着してしまった。

「・・・一年ぶりだな。」

「他の家よりかなり大きい。」

「まあ、一般家庭よりは金持ちだからな。」

家の前でそんなやり取りをしていたが、いつまでもする訳にもいかない。才人はドアの前に立った。タバサが緊張して震えていたので、頭を撫でて「大丈夫だよ。」と言うと、少し安心したのか震えが止まったので、ドアに向き直り、一度深呼吸してインターホンを押した。

ピンポンと音が鳴り、不思議そうな目でインターホンを見るタバサ。家の中から「はい。」という懐かしい声を聞いた瞬間、泣きそうになったが、なんとかこらえる。そして少しすると、ドアが開いた。

「どなたですか？・・・ん？才人・・・よね？何か雰囲気変わったわね。それより、隣の外国人みたいな人は誰なの？」

「あーうん、全部話すから、とりあえず中に入ってもいいかな？話すとき長くなるからさ。」

俺とタバサの真面目な顔を見て、真面目な話だと分かってくれたのか、中に通される。不安げな顔のタバサの手を握ってリビングまで入って行く。リビングには父さんがいて、しばらく呆然と俺とタバサを見ていたが、母さんが何か耳打ちすると、現実に戻ってきたのか、真面目な顔になった。そしてテーブルに父さんと母さんが座ったので、その向かいに俺とタバサが座る。全員椅子に座ると、父さんが話を切り出した。

「で、才人、話して何だ？そちらのお嬢さんと関係あるんだろ？日本人じゃなさそうだが・・・」

本名でいいかと訪ねると、コクリと肯定したので、

「えーと、この子はシャルロット・エレヌ・オルレアンって言うんだ。この子のことより先に色々説明しなきゃいけないんだ。信じられないかもしれないけど。」

「いいだろう、言ってみなさい。」

一度深呼吸して話しはじめる。

「えっと・・・異世界って信じる？」

「「はあっ？」」

両親は、大丈夫かこいつ、という感じでこっちを見ている。予想してたとはいえ、この視線は辛い。

「簡単に言つと、地球とは違う世界で、魔法があるところなんだ。」

「何言ってるんだ、魔法なんてあるはず無いだろう。大丈夫かお前？」

「まあ、そう言つと思ってたよ。じゃあとりあえずこれを見てよ。」

当然の反応に若干ため息をつきつつ、パーカーを捲りあげる。体に刻まれた傷を見た途端、両親の顔が驚きの表情に変わった。そして視線がわき腹の一点にとまった。

「驚いたな、傷だらけじゃないか。それにそのわき腹、他の傷よりかなり大きいようだが、大丈夫なのか？」

その言葉を聞いた途端、タバサがビクツと反応した。そして震える声で謝り始めた。

「・・・ごめんなさい。この傷は私がつけた傷。本当にごめんなさ

い。」

何のことはわからず焦っている父さんを一睨みして、タバサを慰めながら頭を撫でてやる。しばらくして落ち着いてきたのか、気持ち良さそうに目を細めて撫でられている。

「父さん、タバサを泣かせんなよ。」

「す、すまん。そんなつもりで言ったんじゃないんだ。」

「ったく。まあ、いいや。話を戻すよ。納得出来ないんだったら後で証拠見せるから一応最後まで聞いてくれよ。」

戸惑いながらも頷いた父さんと母さんにあつちで一年間どんなことをしていたかを説明した。ひとしきり話し終えたと、今一番重要なことを話す。

「父さん。タバサは行くところも帰るところも無いんだ。だから、タバサをここに住まわせてくれ！頼む！！」

「お願いします。」

俺とタバサと一緒に頭を下げる。

「うむ。まあそれは全く構わんが、条件が2つある。」

条件という言葉に身を固くした俺とタバサを見て父さんが真面目な顔で話す。

「まず一つ目。明日でいいから実際に魔法を見せてくれ。楽しみでしょうがないんだ。そして二つ目。絶対にシャルロットさんと別れ

ないこと。この二つだ。問題は無いな母さん。」

「ええ。才人、シャルロットさんと仲良くするのよ。」

その言葉を聞いて俺とタバサは顔を輝かせた。一つ目はタバサに頼めば大丈夫だし、二つ目なんて問題外だ。タバサも同じことを考えていたのか、嬉しそうに笑っていた。そんな彼女が可愛くて、思いつきり抱きしめた。

「やったなタバサ！！ここで暮らせるぞ。これからはずっと一緒だ！！」

「うん。ずっと一緒。・・・嬉しい。」

「若いつていいなあ。しかもあんなに可愛い娘が彼女だなんて・・・羨ましい」

そんな父さんを冷ややかな目で見つめていた母さんだっけど、

「そういえばあなた。シャルロットさんのお部屋どうします？やっぱり才人と同じ部屋かしら？青春ねえ」

・・・似た者同士だった

そしてその話題にシャルロットが食いついた。

「同じ部屋がいい。できれば寝る布団も同じがいい」

「お、積極的だねえ。分かった！言う通りにしよう！」

俺の意見など関係無しで、どんどん話が進んでいく。そして話がまとまった。結局部屋とベッドは同じということに決まった。それから家の中を案内して、道具の使い方を説明すると、一つ一つに驚い

ているのを見るのがかなり楽しかった。家の案内をあらかた終えろと、俺の部屋に連れて行った。かなり長い間話をしていたので知らず知らずとため息が漏れた。

「大丈夫？」

「ん？ああ、大丈夫大丈夫。話し疲れただけだしさ。あんなにあっさりいくとは思わなかったけどな。」

「でも、才人と一緒に暮らせるようになって良かった。」

「まあ、ウチの親は楽しけりや何でもいいって感じだけだな。」

それから少しだけ話をして、その日はもう寝ることになった。同じベッドではあるが、流石に恥ずかしいので背を向けて寝ようとしたら、思いつき睨まれたので向かいあつて寝ることになった。

「あっちのベッドとは違って流石に狭いな。」

「才人は」

「ん？どうした？」

「才人は私と一緒に寝るの、イヤなの？」

潤んで眼でそんな上目遣いしてくるシャルロット。はっきり言って可愛すぎる。半ば反射的に視線を逸らすと、

「目逸らした。やっぱりイヤなの？」

今度は頬を膨らませてきた。反則だ、と思いながらヤケになった俺は、思いつきりタバサを抱き寄せた。

「そんな訳無いだろ。タバサと一緒に寝れて嬉しいよ」

その言葉に満足したのか、俺の胸に顔を埋めてきた。布団の中で話をしていたせいで、眠くなってきた。

「じゃあそろそろ寝るか、タバサ」

「まだ、ダメ」

まだ何かあんの？と考えていると、タバサが裾を引っ張ってきた。タバサを見ると、目を閉じて何かを待っていた。それを見て、何を待っているのか分かったので、行動に移す。

「おやすみ、タバサ」

「んっ・・・おやすみ、サイト」

キスをした後、才人とタバサは抱き合ったまま、眠りに落ちていった。

Side才人

習慣とは恐ろしいもので、ハルケギニアにいたときのように、朝早く起きてしまった。首だけ動かして時計を見ると、まだ6時前だった。二度寝しようかとも思ったが、眠気もどこかに飛んで行ってしまったので、俺の腕の中でスウスウ寝ているタバサを起こさないようにしてベッドをでる。それからリビングに行って昨日から置きっぱなしだったデルフを持って庭へとでる。ここなら他人に見つかりしないので安心できる。

『放置とはひでえんじゃねえの、相棒?』

「そう言うなって。昨日は俺もタバサも疲れてたんだからさ」

デルフと雑談しながら素振りをする。ガンダールヴのルーンはもう無いので、デルフが重く感じ、いつもより疲れが溜まるのも早い。それでも一年前にくらべればかなり体力も付いたのを嬉しく感じながらしばらく素振りしていると、タバサがきた。

「おはよう、サイト」

「ああ、おはよう」

『おつす』

挨拶が済むと、タバサは素振りの邪魔にならない程度の離れた場所に腰を下ろした。それを横目で確認して素振りを続けていると、次は父さんが来た。

「ほお、起きるの早いじゃないか。素振りも詳しくは分かんが、すごいというのは分かるぞ。今までのお前からは想像もつかん変わりがぶりだな」

「ああ、おはよう父さん。まあ、向こうじゃ毎日こんな感じだったからね。やらないと落ち着かないんだ」「そうかそうか、ところでその剣、それも何かの魔法がかかっているのか?」

『おつよ!オレっちはデルフリンガーってんだ!よろしくな』

「うわっ！ 剣がしゃべった！」

そんなお約束のやり取りを聞きながらタバサの隣に腰掛ける。そしてタバサが俺にもたれてきたのを見て、父さんがニヤニヤしながら話しかけてくる。

「ところで才人、シャルロットさんとはどこまでいったんだ？ ん？」

『俺が教えてやるよ。そりゃもう詳しく！』

工口親父全開の父さんの質問に顔を真っ赤にするタバサ。そんな父さんに何か言おうとしているデルフを鞘に入れて無理矢理黙らせる。

「何言ってるんだよ父さん。タバサが困ってるじゃねえか」

俺を不満気な顔て見てブツブツ言っていた父さんだったが、俺が結構本気で怒ってるのを見て何も言わなくなった。素振りどころではなくなったのでタバサを連れて中に入る。タバサをリビングに待たせて、俺は汗を流すために軽くシャワーを浴びた。その後朝食を食べて俺の部屋に戻ると、タバサが文字を教えて欲しいと言ってきた。

「まあ、文字が読めないってのは結構辛いしな」

「うん、だから教えて欲しい」

「了解しました、お姫様」

最初はそんなにすぐに文字を覚えられるのか不安だったが、さすがは優等生。覚えるの早い早い。昼前には日本語をほぼ完璧にマスターしていた。ちょうど良い時間だったので、町の案内兼、タバサの日用品の買い物がてら昼飯を食べに行くことになった。それを母さ

んに伝えると、「ちょっと待ってなさい」と言っ
てリビングを出て行った。しばらくして戻
ってきた母さんの手には、なんと10枚
ほどの諭吉さんが握られていた。

「これでシャルロットちゃんに服も買
つてきてあげなさい。これは全部使つても
いいから、シャルロットちゃんに似合
う服を買ってあげるのよ?」

「ん、了解」

そしてお金を受け取り、タバサと町
へと繰り出した。

これからずっと…

* 改訂版（後書き）

かなりめんどいです。次話は休日デートみたいな感じです。皆さんが満足できる作品にしたいと思います。あまり期待はしないでください。次からはナレーションではシャルロットではなく、タバサと表記したいと思います。では、また次話でお会いしましょう!!

タバサの学校事情

* 改訂版（前書き）

これからタバサが結構積極的になってきます。どんなタバサでもちゃんとこいやー！という人は楽しんでいてください。そしてこの話からオリキャラが登場します。名前は私が適当に決めました。気にしないでください。

タバサの学校事情

* 改訂版

タバサと手を繋いで・・・は流石に恥ずかしかったので、服の裾をタバサが掴んで商店街を目指して歩いている。土曜日ということもあり、商店街に近づくほど人も増えてきて、タバサとすれ違った人たち（主に男）が振り返ってタバサに視線を向けていた。その視線に感付いたタバサが不安になってきたのか、裾を掴んでいる手に一層力を込めてくる。

「サイト」

「ん？どうした？」

「さつきからいろんな人達に見られてる。私、何か変？」

怯えた小動物のような目でこちらを見上げてくるタバサ。可愛いすぎる！！・・・話が逸れた。そんなタバサに軽く微笑んで、

「まあ、こっちじゃタバサの髪の色はかなり珍しいから目立つんだよ。それより、皆はタバサが可愛いから見てるんだと思うよ」

「・・・サイト以外にそんな風に見られても嬉しくない」

それは反則だ、などと思っていると今のタバサの言葉を聞いた男が俺を、殺意を込めて睨んできていた。そんな調子で15分ほど歩くと商店街に着いた。まずは服屋かな、と考えていたらすぐに見つかったので店に入った。

「タバサはどんな服がいいんだ？」

一応希望を聞いてみる。

「こっちの服のことはよくわからないからサイトに任せる」

こりや責任重大だな、と気を重くしていると、店員さんが寄ってきた。タバサを見るとやはり驚いていたけど、すぐに笑みを浮かべて話かけてきた。さすがだ。

「いらつしやいませ。どなたの服をお求めでしょうか？」

「あ、こっちの女の子の服を買いたいんですけど・・・」

「かしこまりました。ではこちらの服などがでしょうか？」

店員さんに勧められるままに服を選んでいたが、タバサの視線に気付いた。

「どうしたタバサ？」

「・・・サイトも何か選んで」

「え、でも、俺なんかが選ぶより店員さんを選んでもらった方が「それでも、サイトに選んで欲しい」…分かった」

タバサの期待に答える為に真剣に選ぶ。そして悩んだ末に選んだのは空色のワンピースだった。そこ、センス無いとか言うな。マジでへこむから・・・。しかし、タバサは気に入ってくれたのか、大事そうにワンピースを抱えている。

「ありがとう。・・・嬉しい」

「どういたしまして」

そう言つて頭を撫でてやる。タバサの髪はさらさらで気持ち良いんだこれが。タバサも気持ち良さそうに目を細めている。それから下着売り場に行ったが、さすがに下着を選ぶわけはないかないので、そこは店員さんに頼んだ。タバサは若干不機嫌そうにしていたが、いや、下着だけはマジ勘弁してくださいタバサさん。服の会計を済ませて外に出ると、ちょうど昼頃だったのでご飯を食べることにした。

「タバサはどんなのが食べたいんだ？」

「……あれ」

タバサが指差した先は有名なファーストフード店だった。特に反対する理由も無いので、中に入る。そこでタバサが注文したのはビッグマック3個にポテトLを2つ、サラダも2つ頼んで最後にコーラLというものだった。俺が頼んだ軽く倍はある。店員さんはどうにか笑顔を保っていたが、頬が引きつっていた。テーブル席につき、タバサと向かいあつて食べる。

「うまいか、タバサ？」

「美味しい。向こうでもこんなに美味しいのはあまり無かった」

「そうか。そりゃ良かった」

俺とタバサが食べ終わったのはほとんど同時だった。この小さい体で、どうやればあんなにたくさん食べられるのか不思議だ。腹も膨

れたので次は日用品を買いに行くことにした。

「えーと、歯ブラシにタオルに・・・、んー後はほとんど家にあるもので大丈夫かな」

「あれ？平賀じゃねーか。」

タバサの日用品を選んでいたら、後ろから声をかけられた。

「ん？誰だ？」

「俺だよ、宮本。1日で忘れちまったのか？・・・ん？うわっ！誰だこの女の子！平賀の知り合いか！？」

声をかけてきたのは同じクラスの宮本昌明だった。自他共に認める女好きである宮本はタバサを見るとかなり興奮していた。その雰囲気には圧されたタバサは俺の後ろに隠れてしまった。

「ちよっ！落ちつけ宮本！タバサも、こいつは俺の友達だから大丈夫だよ」

「・・・ほんと？」

「うわー！可愛い！平賀、この子誰？」

「あ、ああ。この子はシャルロットって言って...まあ、俺の彼女だ」

「彼女じゃない。私はサイトのお嫁さん」

・・・爆弾を投下してくれやがりましたこんちくしょう。

「ちよっ！タバサ何言つてんだよ！」

「私がお嫁さんだったらイヤなの？」

「いや、全然イヤじゃないけど、むしろ幸せっていうか・・・」

「平賀てめえ！？もう嫁さんなんていやがるのか！それは彼女いない俺への当てつけかちくしょー！！」

何かのイケないスイッチに触れたのか、宮本は走り去ってしまった。めんどくさいし放っておくに限る。

「嵐みたいな奴だったな。まあ、今度ちゃんと紹介するから、買い物続けようぜ」

「（コクッ）」

それからさらに3時間ほど買い物をして回っていると、才人が通っている学校が見えてきた。一年ぶりの学校をじっと見ていると、タバサが聞いてきた。

「サイト。ここは何なの？」

「これは俺が通ってる学校だよ。どうしたんだ、タバサ。通ってみたいのか？」

「うん。サイトが通ってる学校、興味ある。できれば通いたい」

「そうだなあ。俺もタバサと通いたいしなあ。まあ、そのことは家に帰ってから考えようぜ」

そういや、タバサは学年下になるんだよなあ、などと考えている内に買い物が終わったので、家に帰ることにした。家に着いたら6時頃だったのでご飯の前に風呂に入ることにした。湯が溜まったことをタバサに伝えたとタバサが何か言いたげな顔をしていた。

「どうしたんだタバサ。風呂入らないのか？」

「・・・サイトと一緒に入る」

「……え、え〜とタバサさん？どうしてそんなこと言うのかな？」

「まだ使い方がよくわからない。火傷したら危ないから、一緒に入る」

ああそうか、それならしょうがない。・・・わけがあるかあああああああ！！

「タバサ、俺だって一応男なんだからそんなことを軽々しく言うてはいけません」

『いいじゃねえか相棒。向こうじゃ何回も一緒に入ってただろ？』

「そう。だから何も問題無い」

結局タバサの迫力に圧され、半ば無理矢理風呂場に連行された。デルフ、後で覚えてるよ。そんな考えも風呂に入ると一瞬で消え去ってしまった。タバサの体はいつ見ても芸術でしかない。どうにか本能を抑えこんで、頭と体を洗う。その後にタバサにもう一度使い方を説明して湯につかる。しばらくするとタバサも入ってきたが、不機嫌そうに頬を膨らませていた。

「ど、どうして怒ってるんだタバサ？」

「……サイトの背中を流したかった」

「そ、それは流石にちよつと……理性が保たないから」

「じゃあ一つだけお願い聞いて」

「え、でも「聞いて」……はい」

何されるんだろう、とビクビクしているとタバサが俺の太ももの上に座って背中を俺の胸に預けてきた。俺を椅子にして座っているような感じだ。あまりの急展開に頭が真っ白になった。

「抱き締めてほしい」

頭はすでに真っ白なので、タバサの言う通りに体が勝手に動く。

「ん、少しくすぐつたい。……サイトにこうやってもらつたの、落ちつく」

「……はっ！タ、タバサ！流石にこれはまずいつて！？」

ようやく正常に頭が動き始めると、今度はただひたすら焦っていた。なんとも情けない男だ……

「ダメ？」

「いや、ダメってわけじゃ……」

「なら、このままがいい」

口では反対しても、頭ではこの状況を楽しまない手はない、と結論が出た。タバサの体はかなり柔らかい。肌には張りがあるし、髪はシャンプーとタバサ自身の香りも合わさって、鼻を刺激してくる。しばらく堪能していると、タバサは満足したのか、いつもの3割増の笑顔を浮かべて先に出ていった。

「あ、危ねえ。何回も理性が飛びそうになっただぜ。・・・でも、たまにはいいかもな。いやいや、しかし・・・」

風呂の中で悶々と考えていたせいで、のぼせたのは言うまでも無かった。

風呂を出て、しばらく撃沈していたが、晩飯ができたらしいのでタバサとリビングに行った。そこにはいつもの倍くらいの食べ物があった。タバサ一人分足しただけにしては多すぎる量だ。

「母さん。これは多すぎじゃないか？」

いつの間にか仕事から帰ってきていた父さんの一言に母さんは苦笑いを浮かべている。

「あ、あはは。ちょっと張り切りすぎちゃって。食べきれなかったら残してもいいからね」

「大丈夫。全部食べれる」

その言葉通りあんなにあつた食べ物がどんどん消えていった。そんなタバサを見て、父さんと母さんは開いた口が塞がらないといった感じで啞然としていた。そのうちみんな食べ終わったので、今はくつろぎタイムである。

「そういえば、さっきどこに行ってたのかしら？二人ともいなかったけど」

「サイトと一緒に風呂に入ってた」

「え？ホントに！！二人とも、もうそんなに進んでたの？！いいわねえ、若いって」

「なんだって！うらやましいぞ才人！！」

なぜかハイテンションな母さんと悔しそうな顔の父さん。俺とタバサはさっきのことを思い出して顔を赤くしていた。

「シャルロットちゃん！明日は私と一緒に入りましょう？」

「え？でも・・・」

さすがにそれは気まずいのかタバサは困ったような顔を浮かべている。

「サイトの小さい頃のこと教えてあげるから。ね？お願い！！」

「入る」

「じゃあシャルロットちゃん。明後日はワシと黙ってるエロ親父！！ぐはっ！！」

母さんの出した条件に即食い付いたタバサ。タバサと風呂に入るなとどぶざけたことをぬかしたエロ親父を殴り飛ばしたところで、今日ずっと考えていたことを口に出した。

「そういえば、タバサって学校とかどうするんだ？」

その質問を聞いて、さっきまでの騒がしさはなくなり、みんな真剣に考え始めた。切り替え早いな……

「私はサイトと同じ学校に通いたい」

「同じ学校に通うとしても、タバサは年下だから学年は下になっちゃうぞ？」

「それはヤだ」

「それに、シャルロットちゃんはまだこっちのことをあまり知らないから勉強について行くのも辛いんじゃないか？」

考えれば考えるほど不安材料が出てくるな。そんな中ずっと静かだったデルフが口を開いた。

『オレっちにはよくわからねえけど、計算はともかく語学や歴史とかはこの国の人間じゃないからっていうのは理由にならねえのか？ それにその娘っことは勉強熱心だから覚えるのもすぐだろうっ？』

「なんだ、デルフいたのか？」

『随分な言い草だな相棒。今日1日ずっとオレっちを放置しとしてその言葉はあんまりじゃねえか』

「じゃあねえだろ。お前を持って歩くわけにもいかねえんだから。でもデルフの言う通りだな。留学生ってことにしとけば大丈夫なんじゃねえか？」

「まあ、年齢も少しくらいは誤魔化しもきくだろっしな。よし！デ

ルフ君の案を採用しよう。入学手続きとかはワシがやっつくから、今日はもう寝なさい」

意外にもすんなり話が進んだので拍子抜けしたが、タバサが学校に通うことには賛成なので、素直に喜ぶことにして、今日はもう寝ることにした。

「ふあゝあ、今日も疲れたな。タバサ、体は大丈夫か？」

「少しだけ疲れた。でも、サイトと同じ学校に通えるから嬉しい。クラスも同じだったらもつと良い」

「まあ、そこら辺は父さんがどうにかしてくれるだろ。じゃあもう寝ようぜ」

「うん。・・・サイト、今日もお願い」

「……わかった」

昨日と同じようにタバサにキスをする。

「・・・ん」

「じゃあ、おやすみタバサ」

「おやすみ、サイト」

そっぴや国籍とかはどうするんだろう、と考えながら眠りに落ちていった。

平賀家の休日 * 改訂版（前書き）

才人の父さんがどんどん壊れていつてるような気がする。しかし、反省はしても後悔はしていない。

朝7時頃に目が覚めた。タバサは俺の腕の中で可愛い寝息をたてている。寝顔があまりにも可愛いかったので、魅入ってしまった。そしていつもの癖でしばらくタバサの頭を撫でていたら、タバサが起きてしまった。

「あ、わりい。起こしちゃったか？」

謝るために頭を撫でるのを止めて、手をどかしたが、

「もつと」

「ん？」

「もつと撫でて」

「ああ、はいはい。こんなので良ければいくらでも」
また撫でるのを再開すると、タバサは気持ち良さそうに目を細めた。その様子が可愛くて、ついつい抱きしめてしまった。そしてその瞬間に部屋のドアが開いた。

「おゝい才人ゝ、起きてるかゝ？ちょっと実際に魔法をやってみてくれ・・・ない・・・か」

「「あつ」

「あゝ、すまん。邪魔したな。なんか良い雰囲気だから、魔法は後でいいわ」

ボタン、とドアが閉まった音がしたが、俺とタバサはしばらく呆けていた。3分ほどたつてようやく戻ってくることができた。

「・・・あゝ、とりあえず父さんに魔法を見せてあげてくれるかタバサ？」

「わかった」

部屋を出てリビングにいた父さんに話しかけると、3人で庭に移動することにした。移動中父さんが悔しそうな顔でこつちを睨んでいたが、気にしないことにした。そして庭に到着したので、タバサとどんな魔法にするか相談して、レビテーションを父さんにかけることに決まった。

「じゃあ父さん。今から父さんに魔法かけてもらうからじっとして。タバサ、頼んだ」

「任せて。『レビテーション』」

タバサがレビテーションを唱えると、父さんの体が浮いた。父さんは急に体が浮いたので、若干パニック状態になっている。

「お、おおっ！？か、体が浮いてる！すごい、浮いてるぞ！！」

かなりハイテンションになっている父さんには悪いが、朝飯ができたということなので父さんを降ろしてもらった。

「はー、魔法はすごいなー。才人は使えないのか？」

「俺はメイジじゃなくて剣士だったからな。それに杖がないと、魔

法は使えないしな」

「ほー、そんなもんなのか。シャルロットちゃん、魔法見せてくれてありがとうな」

「どういたしまして」

雑談している内にリビングに着いたので、ご飯を食べることにした。また量が凄かったけど、もう気にしない。食べ終わると、父さんが今日の予定を聞いてきた。

「今日はタバサと勉強しようと思ってんだけど」

「そうか。しかし、お前あんまり頭良くないだろう？大丈夫なのか？」

余計なお世話だ、と話していると、父さんの手にデルフが握られているのに気付いた。

「父さん、デルフなんて持ってどうするんだ？」

「いや、昨日デルフ君と話をしていたら妙に馬が合っつてな、今日も一緒に話をしようかと思ってるんだ」

『いやー、相棒。おめえの父ちゃんなかなかおもしれえじゃねえか。いい退屈しのぎになるぜ』

そうして会話を始めた一人と一本を見て、嫌なコンビが生まれたな、と結構本気で思っていると、タバサが服の裾をくいくい引っ張ってきた。

「ん？どうした？」

「昨日買ってくれた服の場所教えて」

「ああ、それなら俺の部屋の机の上に置いてあるよ。取ってこようか？」

「大丈夫、ついでに着替えるから。覗いたらダメ」

「の、覗かねえよ！」

そう言っで着替えに行ったタバサを見た後、母さんがこっちを見てきた。

「昨日、シャルロットちゃんにどんな服を買ってあげたの？」

「んゝ、ほとんど店員さんに任せっきりだったからな。あ、でも一つだけ俺が選んだのがあるな。シンプルなワンピースだけど」

しばらくすると、着替えたタバサがリビングに戻ってきた。着ていた服は俺が選んだワンピースだった。

「似合ってるじゃないシャルロットちゃん！才人の割には良いもの選んだわね」

「ありがと。・・・どうかなサイト？」

「・・・・・・・・・・」

「サイト？」

「ああ、気にしないでシャルロットちゃん。この子、シャルロットちゃんがあまりにも可愛いから見惚れてるのよ」

それを聞いて、タバサの顔が赤くなった。

「か、母さん！何言ってるんだよ！」

「あら、ホントのことでしょう？二人ともホントにラブラブね、うらやましいわ」

「タ、タバサに勉強教えてくる。行こうぜ」

「・・・うん」

俺たちは逃げるようにしてその場を去った。部屋に行くだけなのに、かなり疲れた・・・

「はあ、母さんにも困ったもんだ」

「サイト、さっきの本当？」

「え、何が？」

「私に見惚れてたっていうのは本当？」

困った。部屋に戻ってまでその話が続くとは思ってなかった。

「そ、それは・・・」

「どうなの？」

タバサは俺の服の裾をしっかりと掴んでいる。その目は逃がしないと語っている。

「う・・・ハ、ハイ。見惚れてました。タバサがあまりにも可愛かったもんで見惚れてました、ハイ」

それを聞いたタバサの顔が綻んだ。どうやら満足したらしい。

「勉強」

「ん？ああそうだな。じゃあ日本語の復習でもするか。しっかり覚えないと本読むときにも困るしな」

「本読むから、わからないところがあつたら教えて」

「了解。じゃあ俺はこっちで勉強してるから。」

「分かった」

それから勉強していると、結構頻繁に漢字の読み方をたずねてきた。仮名文字はすぐに読めるようになったが、漢字は難しいようだ。しばらくタバサの勉強に付き合っていると、下のリビングから声が聞こえてきた。（俺の部屋は二階にあるんだ）

「シャルロットちゃん、ちょっと来てくれないかしら？あ、才人は来なくていいわよ」

「どうしたのかな？」

「さあ、何だろうな？まあ、行ってみりゃ分かんじゃねえか？」

「じゃあ行ってくる」

そう言つてタバサがリビングに行ったので、自分の勉強に専念することにした。一年間勉強していなかったので、数学や日本史なんかはほとんど忘れてしまっていた。勉強していると、たまに下から叫び声が聞こえてきたが、敢えて無視することにした。そしてちょうど昼頃になると、タバサと母さんが呼びに来た。

「才人、お昼ご飯よ」

「サイト、早く」

腕をグイグイ引っ張ってくるタバサに疑問を覚えながらも、リビングに到着すると、違和感を感じた。並んでいる料理を見ると、その違和感の正体に気付いた。いつもより盛り付けがいびつだったのだ。

「あれ？母さん、この料理ってもしかして・・・」

「そうよ、シャルロットちゃんが作ったのよ。私も所々手伝っただけど、ほとんどシャルロットちゃんの手作りよ」

さつきから急かしてきた理由はそれだったのか、と納得していると、

「食べてみて」

「あ、ああ。じゃあいただきます」

「いただきます」

料理の内容はいたってシンプルだった。ご飯に味噌汁、卵焼きに鯖の味噌煮、サラダ類といった感じ。完璧に和食だから母さんが教え

たんだろっ。

「んじゃあ、まず鯖をもらおうかな」

鯖を一口食べてみる。少し味が濃かったけど、俺としては薄味よりこっちの方が好みだ。それから味噌汁、卵焼きと食べていったが、どれも普通に美味かった。

「・・・どう、サイト？」

「うん、どれも美味しいよ。タバサ、料理上手だったんだな」

「作ったのは今日が初めて。サイトのお母さんにやり方を教えてもらった」

「そうなのよ。シャルロットちゃん、指示通りにてきぱき動くのよ。初めてなのに大したもんだわ。才人の彼女にしとくなんてもったいないわねえ」

「そんなことない。サイトは私が知ってる中で最高の人」

「あらあら。良かったわね才人、こんなに綺麗な子にここまで好かれるなんてもう無いわよ？絶対シャルロットちゃんを逃がしちゃダメよ？」

「はいはい、分かってますよ」

母さんのたわごとを軽く受け流して、食べることに集中する。うん、やっぱり美味しい。早々に食べ終わったのでデルフを持って庭に行くことにした。

「ごちそうさま。ちょっと素振りしてくるよ」

リビングを出て、玄関を通って庭に出た。

「はー、タバサの飯美味かったな」

『相棒、顔がニヤけてるぜ』

「しょうがねえだろ？タバサの飯が食えるなんて思ってたんだから」

『まあ、幸せなのはいいが剣の練習は怠んじゃねえぞ。この世界であの娘っこを守れんのはお前さんだけなんだからよ』

「分かってるよ。こっちにだって危険はあるしな。それにタバサの容姿はこっちじゃ異常に目立つからな」

『そついや、見た限りじゃほとんどが黒髪か茶髪だったな。相棒も娘っこもこれから大変だな』

「まあ、どうにかするさ。何かあったら助言頼むぜ。伝説の剣」
『任せときな伝説の使い魔・・・じゃなくなっただったな』

そんな下らない話をしながら二時間ほど剣の練習をした。それから軽くシャワーを浴びて部屋に戻ると、タバサがベッドの上で寝ていた。

『無防備だな。向こうじゃこんななかったな』

「いいことじゃねえか。そんだけ安心できるってことだろ？」

「・・・ん・・・サイト？」

「あ、わりい。起こしちゃったか？寝てていいぞ？俺は宿題やっているから」

「うっん、大丈夫。」

眠そうな目をしているタバサをそのままにして宿題を始める。

「宿題？」

「ああ、明日からまた学校だからな」

「・・・そう」

宿題をしているうちに日が暮れてきた。タバサはベッドの上でずっと本を読んでいる。

「シャルロットちゃん、お風呂一緒に入りましょー！」

「・・・母さんだ。昨日言っていたことは本気だったらしい。」

「行ってこいよ、タバサ」

「・・・うん」

さて、剣の練習で結構疲れたし、俺はしばらく寝るとするかな・・・

S i d e タバサ

「シャルロットちゃん、見れば見るほど綺麗よねえ。肌とかすべで、なんか高貴な感じのする綺麗さっていうか」

「向こうでは、一応王族だった」

「え、ホントに?!・・・何があればそんな子がうちの才人になびくのかしら?」

「王族なんて関係ない。私はサイトが好き。ただそれだけ」

「・・・そっか。じゃあこれからも才人のことよろしくね」

「こちらこそ」

サイトのお母さんは優しい。こちらのことをあまり詳しく聞いてこようとしてない。それがとても嬉しい。それから服を脱ぎ始める。そして、サイトのお母さんが下着だけになったときに、あることに気が付いた。

じーーーー

「?どうしたのシャルロットちゃん?」

「・・・大きい」

何が、とは言わない。言ったら負けな気がするから。

「そうかしら?私が学生ときはみんなこんな感じだったから気にしたこと無いわね」

ヴァリエールが聞いたら卒倒しそうだ。ちなみに大きさはシエスタ

以上、キュルケ以下という感じ。

「私は・・・」

比べるまでもない。サイトを好きになるまでは気にしたことなど無かったけど、今では惨めに感じる。サイトは大きさをなんて関係ないって言うてくれるけど、やっぱり大きい方が嬉しいはずだ。

「やっぱり、これ以上は無理・・・」

「大丈夫よシャルロットちゃん。あなたはまだ成長期なんだから、これからまだまだ大きくなるわよ！」

「・・・そうかな？」

「そうよ！だから、あんまり気にしちゃダメよ？これからどうとでもなるんだから」

「うん・・・頑張る」

そんな話をしながら湯船につかる。サイトと入ったときとは違って向かい合って座ってるから少し狭く感じる。

「そういえば、才人って向こうではモテたのかしら？どうなの、シャルロットちゃん？」

「私を入れて4人の子がサイトを取り合ってた」

「・・・両手に花なんてもんじゃないわね。こっちじゃ全然モテなくて、一度も彼女なんてつくったこと無かったのに」

「それなら誰かにサイトを取られる心配がない。安心できる」

（私的にはシャルロットちゃんの方が心配なんだけどね）

「？何か言った？」

「ん〜ん、何でもないわよ（才人、誰かにシャルロットちゃんを取られたりしないように、頑張りなさいよ〜）」

それから、色々な話をした。サイトの小さい頃の話聞くのはとても楽しかった。こんな話が聞けるなら、これからもたまにサイトのお母さんとお風呂に入るのもいいかもしれない。

S i d e 才人

タバサが風呂に行ったので寝ようとした・・・のだが、父さんに起こされた。

「才人、聞きたいことがある」

「せっかく寝ようとしてたのに・・・で、聞きたいことって何？」

「うむ・・・才人、シャルロットちゃんのスリーサイズを教えてください」

「んなの聞いてどうするつもりだ、このエロ親父!!」

父さんてこんなだったか？こんなにエロ親父発言をするような人間では無かったような気がするけど。

「いやな、やっぱり将来娘になる子のスリーサイズは知っておきたいじゃないか」

なんも関係ねえじゃねえか、と心の中で突っ込むが口には出さない。

「知らねえし、知ってても誰にも教えねえ」

「いいじゃないか。少しくらい教えてくれてもバチは当たらんぞ？」

「ええい、しつこい！これ以上聞いてくるなら母さんに言い付けるぞ！」

さすがに母さんにはれるのは怖いのか、諦めてくれたようだ。まだ何かブツブツ言っているが無視。やっと寝れると思つて寝転がったが今度はデルフに声をかけられた。・・・頼むから寝させてくれ。

『相棒もケチだねえ。それくれえ教えてやりやいいのに。そんなにあの娘っこを独占してえのかい？』

「いや、このエロ親父は話が別だろ。そりゃタバサを独占したいって気持ちはあるけどよ」

『でもよ相棒。あの娘っこが学校に行き始めたらそうもいかねえんじゃないか？ なんだってあの髪の色にあの容姿だからな。どうしたって目立つちまうし、言い寄ってくる奴だつていないとは限らねえぜ』

「そうなんだよな・・・まあそこら辺は学校に通い始めてから考えるよ。タバサに手を出すような奴は問答無用で消すけどな」

『娘っこも大変だねえ。こんなのに捕まっちまって。』

「そうなの？」

『ああ。相棒は独占欲の塊だな。逃げたくても逃がしちゃくれねえと思うぜ？』

「・・・サイトになら独占されてもいい」

知らないうちに声が一つ増えている。

「・・・いつからいたんだタバサ？」

「問答無用で消すけどな、ってところから」

良かった、スリーサイズの話は聞かれてなかったみたいだ。

「そうか、なら問題無い。俺も風呂に行つてこようかな。・・・あ、父さん、タバサに何か変なこと言ったらデルフで斬るから」

タバサに近寄っていた父さんを脅しておく。俺の殺気を感じとったのか、父さんはタバサから離れた。それを確認して風呂に行く。俺が出て着替えると、ちょうど晩飯がきたらしく、いい匂いがした。そしてみんなで席につく。

「・・・いただきます」

「・・・サイト」

「ん？どした？」

「やっぱり大きい方がいい？」

そう言つて、自分の胸をペタペタ触るタバサ。急に何を言いやがりますかこの娘は。

「な、何で急にそんなことを・・・」

「さつきスリーサイズの話をしてたつて、デルフリンガーから聞いたから」

あの野郎、後でお仕置きしてやる。そんな中、父さんが身を乗り出してきた。

「ワシはそのままでも良いとおも「あなた？」・・・はい、すいません」

母さんに睨まれて黙らされる父さん。可哀想に。ただの自業自得だが・・・

「えつとなタバサ。俺は大きいから好きとか小さいから好きとかじやなくて、タバサが好きなんだ。だから、大ききなんて関係ないんだよ」

「・・・うん、わかった」

渋々だが納得してくれたようだ。これ以上この話題を続けるわけにもいかないの、話を切つて、飯を食べることに集中する。みんなもそれ以上そのことについて話そうとせず、ほどなくしてご飯を食べ終わった。それから、テレビを見たり、タバサに文字を教えたりして時間を潰していたが、明日ら学校があるので早めに寝ることにした。

「タバサ、俺先に寝るから。タバサも適当な時間に寝ろよ」

「私も一緒に寝る」

「そうか？・・・あ、そうだ。俺明日から学校だから、タバサには母さんと一緒に家で居てもらうことになるんだけど・・・」

「私も一緒に行く」

「そう言つと思つたよ。でもまだ入学手続きが終わつてないからあと数日我慢してくれ」

「・・・わかつた。・・・でも早く帰つて来て」

悲しそうな目で見上げてくるタバサ。こんな顔されたら断るなんてできるわけがない。

「ああ、わかつたよ。学校終わつたらすぐに帰ってくるから。・・・よし、じゃあもう寝ようぜ」

「うん、おやすみサイト」

「おやすみ、タバサ」

そして昨日と同じように眠る。明日からまた大変なことになりそうだ・・・

その頃庭では、

『おゝいあいぼゝ、オレっちが悪かったよゝ。だからもう抜いてくれよゝ』

刀身を根元まで地面に突き刺されたデルフが朝まで放置されたとかされなかったとか。

平賀家の休日

* 改訂版（後書き）

皆さんの感想、ご意見をお待ちしています。これからもどうぞよろしく願います。

一年ぶりの学校、タバサの憂鬱（前書き）

これからテスト期間なので、投稿が遅くなるかもしれません。本当に申し訳ありません。

一年ぶりの学校、タバサの憂鬱

6時頃に目が覚めた。時間に余裕があるので剣の練習をしよう、と思ったがデルフがいない。・・・ああ、そうだ。昨日お仕置きとして庭に突き刺したままだっけ。タバサを起こさないように部屋を出て庭に行く。デルフはやっぱり刺さったままだった。

「ようデルフ。よく眠れたか？」

『ひでえじゃねえか相棒。放置するなんて』

「余計なこと喋るお前が悪い」

デルフとダベリながらも、剣の練習は真剣にやる。気が付くと7時前だったので、練習を切り上げてシャワーを浴びる。ついでにデルフに付いた泥も落としてやる。

リビングに行くと朝食の準備をしている母さんとタバサがいた。父さんは出勤時刻が遅いのでまだ寝ているのだろう。

「おはよう母さん、シャルロット」

「おはよう才人」

「サイト、おはよう」

ちょうど朝食ができたようなので3人で一緒に食べる。

「・・・いただきます」

「はあ、今日から学校か。・・・一年ぶりだ」

「向こうで全然勉強とかしてなかったんでしょ？大丈夫なの？」

「まあ、元からあんまり成績良くないし、これ以上はなかなか下がったりはしないだろ」

そんなことを話していたら結構時間がたってしまったので、慌てて準備する。そして玄関に来たところでタバサに呼び止められた。

「サイト、お弁当」

「才人、そのお弁当、シャルロットちゃんが全部一人で作ったのよ。味わって食べなさいよー？」

マジか。朝からなんて嬉しいイベントだ。

「ありがとな、シャルロット。わざわざ作ってくれて」

「ううん、サイトが喜んでくれるならそれでいい」

「ホントにありがとな。じゃあ行ってきます」

「「行ってらっしゃい」「」」

そうして今日の波乱に満ちた一日が幕を開ける。

S i d e 才人

俺は今学校に向かっている。学校までさほど距離は無いので徒歩で通っている。

「この道も一年ぶりだなあ」

ゆったり歩いていると、後ろから声をかけられた。

「おい平賀、何ゆっくり歩いてんだよ。遅刻しちまうぞ?」

声をかけてきたのは幼稚園からの幼馴染みにしてクラスメイトの宮本だった。

「ん? ああ、宮本か。って遅刻? んな訳ないだろ。俺の時計じゃまだ8時だぜ。・・・あれ?」

秒針が動いていない。ということは・・・

「走るぞ宮本!」

「おうよ!」

そして全力疾走を続けること15分。なんとか遅刻せずにすんだ。朝っぱらから汗をかいているという嫌な状態ではあるが。

「ひ、平賀。お、お前あんなに足速かったか?」

「まあ、俺が本気で走ればこんなもんなんだよ」

肩で息をしている宮本に適当に答える。異世界で鍛えたなんて言っても信じないだろうし。納得してない宮本だったが、先生が来たので席につく。とは言ってもすぐ傍だけど。ちなみに俺の席は窓際の一番後ろ。前の席が宮本で、隣は人数の関係で空いている。

「さて、今日の日程だが・・・」

先生の話の適当に聞き流していたら、宮本がこちらに顔をむけてきた。

「ところで平賀、一昨日一緒にいた女の子は誰なんだ？一昨日はちゃんと聞けなかったしさ」

「あれはお前が勝手に走って行ったんだろうが。まあいいや。あの子は俺の知り合いで、シャルロットっていつてな。まあ事情があって今俺ん家で暮らしてる」

「お前にあんな外国人の知り合いいたか？聞いたこと無いぞ？」

逆に知ってたら大したもんだ、などと考えていたら授業が始まるチャイムが鳴った。

「まあ、今度またちゃんと紹介するから」

そう言つて授業に集中する。さて、これから昼休みまで頑張りますかね。タバサの弁当食べるのが今から楽しみだ。

Sideシャルロット

サイトが学校に行つてすることが無くなったので、サイトの部屋に戻つて本を読みながら、漢字の勉強を始める。最初は集中していたが、徐々に集中が切れ始める。

「落ち着かない」

いつもなら嬉しいはずの静かさが、今はとても辛く感じる。

「・・・サイトがないからかな」

そう呟くと、壁から声が聞こえてきた。

『ホントにお前さんらはラブラブだねえ。見てるこっちが恥ずかし
いくらいだぜ?』

「そうなの?」

『ああ。知ってるか? 相棒の奴、こっちに帰って来たときお前さん
と別れたのが辛くてボロボロ泣いてたんだぜ?』

本当なのだろうか? 私に会ったときには泣いてなかったから良く分
からない。

『ていうかお前さん。相棒が家を出て3時間程度だぜ? まだ昼にも
なつてねえ。そんなに今日一日保つのか?』

デルフリンガーの言う通りだ。昼前でこれなのだから、夕方までな
んて気が遠くなりそうだ。そんなことを考えていたら余計に寂しく
なつてきた。

「・・・・・・サイト」

『お、おい。どうしたんだ?』

「サ・・・トが・・・いと・・・い」

『え、なんだつて?』

「サイトがないと寂しい」

『ん、じゃあ何か楽しいこととか考えれば気も紛れるんじゃないか？』

「例えば？」

『そんなくらい自分で・・・じゃあねえか。例えば、今日作った弁当を食べた相棒がどんな反応するか、とか？』

・・・それは良いかもしれない。昨日作ったお昼ご飯はおいしいと言ってくれた。その時の笑顔が嬉しかったから、またそれが見たくてお弁当を作ったのだった。

「サイト、また美味しかったって言ってくれるかな？」

サイトが笑顔を向けてくれるのを想像（妄想）して、若干ながらも寂しさが和らいだので、勉強を再開する。早くサイトと一緒に学校に行きたいな・・・

S i d e 才人

キーンコーンカーンコーン

お馴染みのチャイムが鳴り、4時間目の授業が終わった。やっと、やっと待ちに待った昼飯だ。俺は即行で弁当箱を開ける。

「・・・すげえ」

思わず声が漏れた。その弁当は、彩りは完璧、盛り付けの仕方申し分無し、勿論冷凍食品なんて一つもなかった。そして、食べようとしたらメモ書きがあることに気が付いた。

『サイトへ

お弁当を作ったのは始めてだったから、サイトの口に合うかは分からないけど、全部食べてくれると嬉しいです。帰ってきたらお弁当の感想聞かせてね？

シャルロットより

P S ・早く帰ってきてね？』

所々誤字があるが、それでも一生懸命作ってくれたというのはイヤという程伝わってきた。こりゃ速攻で家に帰らねえとな、思いながら弁当を食べ始める。

「うん、やっぱりうめえな。」

正直なところ、俺は母さんの味付けよりタバサの味付けの方が好きだったりする。

「お、平賀、その弁当美味そうじゃん。ちょっと分けてくれよ」

「ダメだ」

「えゝ、いいじゃねえか、ちょっとくらい」

「ダメだ。この弁当だけはダメだ。今度食い物奢ってやるから、これだけは勘弁してくれ」

「しゃあねえな、絶対何かおこれよ?」

それからしばらくすると飯を食べ終わった。ゆっくり食べていたの
で、もうすぐ授業が始まる。さて、後ちよつと、気合い入れますか!

~~~~~

「あゝやつと終わった。・・・よし! 帰るか!」

「お、待てよ平賀。一緒に帰ろうぜ」

「いいけど俺は急いで帰るから、それでもいいか?」

「ああ、いいぜ。俺今日お前ん家行くから」

「は? 何で?」

「いやー、最近お前ん家行つてなかったからさー、たまにはお前の  
母さんに顔を見せところかなー、と」

「シャルロットの顔が見ただけなんじゃねえのか?」

「そうとも言つな。ま、気にするな。ほれほれ、早く帰るんだろ?」

しょうがねえな、と思いつつ帰路につく。・・・面倒くさそうなの  
になりそうだ。

S i d e シャルロット

チラッ、

「4時10分」

サイトが学校が終わると言っていた時間。もうすぐサイトが帰ってくる。

・・・チラッ

4時20分

早く帰って来ないかな。

・・・・・・チラッ

4時30分

・・・来た!!

急いで階段を降りて玄関で止まる。早く、早く・・・

ガラッ!

「サイトっ!!」

S i d e 才人

家のドアを開けた瞬間、タバサが抱きついてきた。

「サイトっ!!」

「うわっ。シ、シャルロット? わ、悪い宮本、先に中に入ってリビングで待っていてくれないか?」

「あ、ああ分かった。じゃあまた後でな（くそっ、なんてうらやましい！）」

そう言っ宮本は中に入っていった。

「で、どうしたんだシャルロット？」

タバサは絶対離さないといった感じで俺の胸に顔を埋めている。

「・・・サイトがなくて寂しかった」

ああ、そういうことか。

「ごめんな。今日はもうずっと家にいるから」

「ほんとう？」

「ああ、ほんとうだ。だから離れてくれないか？」

「やだ。今日はサイトから離れない」

そう言っ腕に抱きついてくるタバサ。これは離れてくれそうにないな、しょうがないからこのまま中に入ろう。

「待たせたな宮本。」

「おう、早かった・・・な・・・。ひ、平賀、てめえなんてうらやましい・・・！」

「お、落ち着け宮本。ほ、ほら、ちゃんと紹介するから。こっちは

シャルロット、俺の彼女だ。訳あってここに住んでる。訳は聞かないで欲しい。そんでもってこっちは宮本、俺の幼馴染みでクラスメイトだ。」

「よろしく、シャルロットさん！うわー、やっぱり可愛いなー！」

「・・・よろしく」

シャルロットはなかなか前に出てこようとしない。

「なあ平賀、俺嫌われてんのかな？」

「お前のテンションがヤバイんだと思うけどな」

それからしばらくしてようやく出て来たが、宮本に対する警戒心はまだ残っているようだ。

「よし、じゃあ宮本、そろそろ帰れ」

「ええー、いきなりかよ！もうちょっとくらい居ても良いじゃねえか」

「シャルロットとはそのうち学校で会えるだろうから、話はその時にしてくれ。シャルロットの警戒心がハンパねえんだよ。警戒心を解くくらいはしといてやるから、今日はもう帰れ」

「それじゃあしょうがねえな、じゃあ帰るわ。じゃあシャルロットさん、また学校でね」

そう言って宮本は帰っていった。宮本が家から出たのを確認すると、

タバサは安心したようにこちらにもたれかかってきた。

「どうしてあんなに警戒してたんだ？」

「あの人、こっちをずっと見てた」

「まあ、シャルロットはかなり可愛いからな。それにこっちの世界じゃ、蒼髪に碧眼なんてほとんどいないから珍しかったんだよ。宮本は良い奴だから次に会うときは普通に接してやってくれないか？」

「分かった。サイトがそこまで言うんだったら、悪い人じゃないはず」

どうやら納得してくれたようだ。安心したら急に眠気が襲ってきた。確かに今日はかなり疲れた（主に精神的に）。

「悪いシャルロット、俺ちよつと寝るわ」

だから適当に時間潰してくれって、言おうとしたんだが、私も一緒に寝る、と言ってきたので言うことができなかった。そしてタバサを連れて自分の部屋に入るとデルフがからかうように話しかてくる。

『いよー、愛されてるねあいばー』

「？何がだ？」

『いやよー、その娘っこな、相棒が学校に行ってる間ずっとソワソワしててよ、3時頃だったかな？涙浮かべて小さく震えてたんだぜー？』

「・・・そうなのか？」

顔を真つ赤にしてコクリと頷くタバサ。ヤバイ、可愛い。・・・じやなくて。

「悪かったな。もうすぐしたら一緒に学校行けると思うから、あとちよつとだけ我慢してくれな？」

「・・・わかった」

そう言つてベッドに入る。タバサはと言うと、いつもより体をくつつけて俺の胸に顔をグリグリと押し付けてきてる。そんなに寂しかったのか、と苦笑いを浮かべる。

「おやすみシャルロット」

「・・・おやすみ」

そんなタバサを抱きしめて、いつもより密着した状態で眠りにつく。そしてその日はそのまま朝まで寝てしまうことになった。

・・・起こせよ。

## 初めての学校

\* 改訂版（前書き）

遅くなって申し訳ありません。急場しのぎで作ったので、満足していただけないかもしれませんが、楽しんでください。

ちなみに、これから一週間ほどは、もう一つの方に力を入れたいと思っています。こちらを楽しみにしている方には本当に申し訳ありません。

## 初めての学校

\* 改訂版

宮本が家に来た日から一週間、その間のタバサの様子はすごいものだった。まず家を出ようとすると制服を掴まれて、説得して離してもらうのに5分ほど使う。そして、家に帰ってきて玄関を開けたら、必ずタツクルをしてきた。一度反射的に避けてしまった時は、タツクルを外したタバサにマジ泣きされそうになった。あれはホントにビビった。他にも色々あるが、説明していたらキリがないので省かせてもらう。しかし、それももう終わり。なぜなら・・・

「わー、似合ってるわよタバサちゃん」

「・・・ありがとう」

そう。今日からタバサも学校に通うことになったのだ。学校に通えるのが本当に嬉しかったのか、タバサは昨日からずっと笑顔だ。

「サイト、これどうかな？」

「ああ、めちゃくちや似合ってるぞ。魔法学院の制服も似合ってたけど、セーラー服も新鮮でいいな」

「・・・えへへ」

ヤバイ、可愛すぎる。

「サイト、イチャイチャするのはいいが、時間は大丈夫なのか？」

「あ・・・」

そつだ、今日は職員室に挨拶しに行かなきゃならないから早く出なきゃいけないんだつた。

「それじゃあ、そろそろ行こうぜタバサ」

「うん」

そう言つて玄関に向かう。

「じゃあ行つてきます」

「行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。気を付けてね」

「氣い付けてな」

『・・・オレっち今日からホントに暇だな』

「あら、じゃあ私と話しましょうよ。向こうで才人がどんな感じだったか教えてくれないかしら？」

『おう！お安い御用でい！』

そして一人と一振りは才人の話題で大いに盛り上がったとか。

「サイト、学校つて楽しい？」

「んーどうだろうな？楽しい楽しくないは別として、新鮮だとは思つぞ」

「・・・・・・・・新鮮」

タバサはこれからの学校での生活について想像しているようだ。ちなみに、二人の周りに他の生徒はいない。いつもより30分ほど早く出たから当然といえば当然だが。

「まあ、覚悟はしておいた方がいいぞ」

「なんで？」

「外国人が編入してくるなんてまず無いからな。間違いなくクラス  
の奴らから質問せめにあうと思う」

「・・・・・・・・」

無言で学ランの裾を掴んでくる。

「大丈夫だって。いざとなったら助けてやつから」

「うん。頼りにしてる」

そうこうしているうちに学校に着いた。これから職員室に行つて挨拶しなきゃいけない。・・・職員室の雰囲気苦手なんだけどな。

ガラッ

「失礼しまーす」

「失礼します」

「ん？ああ平賀か。そついや挨拶にくるとか言ってたな。・・・じゃあその子が？」

「あ、はい、シャルロットです。じゃあシャルロット、自己紹介よろしく」

「うん。・・・はじめまして、シャルロット・エレーヌ・オルレアンと言います。今日からよろしくお願いします」

「ああ、俺は平賀のクラスの担任の仙石だ。」

そう。今話しているのは担任の仙石秋良<sup>あきひ</sup>、35歳、嫁さん有り、良い先生なんだけど、性格が何というか・・・ガキっぽい。しかし、先生としては優秀だ。大切なところなので二回言いました。

「え、シャルロットさん・・・でいいのかな？」

「はい」

「シャルロットさんはあまり学校のことは良く分からないだろうから、平賀と同じクラスにしてみました。それでいいかな？」

「はい！ありがとうございます！」

急に良い返事になったタバサ。そんなに同じクラスになりたかったのか。

「そんなに嬉しかったか？」

先生も同じ意見らしい。

「はい、とても嬉しいです」

「そーかそーか、そりや良かった。ところで平賀、シャルロットさんはお前の彼女か？」

「え？ああ、はい。そうですよ」

「ほー、なかなかやるじゃないかお前」

先生と話をしていたら教室に行く時間になった。

「じゃあ平賀、先に教室に戻ってろ。HRの時にみんなに紹介するから」

「了解つす。じゃあタバサ、また後でな」

「うん」

「あ、そうそう。先生、タバサに手出したりしたら殺しますよ？」

「出さんわ！！俺には嫁さんいるから！そんなことしたら殺されるから！」

「ははっ、分かってますよ。じゃあ、失礼しましたー」

職員室を後にして教室に向かう。教室に入ると、みんなどこかソワソワしていた。とてつもない留学生が来るって聞いてるらしいからしょうがないんだろうけど。

「よ、平賀」

「おっす、宮本」

席につくと宮本はもう来ていた。

「今日からシャルロットちゃん来るんだろ？」

「ああ、HRの時にみんなに紹介するって仙石さんが言ってた」

「そうか。楽しみだな」

「何がだ？」

「だって平賀の横の席、机が増えてるだろ？ってことはそこにシャルロットちゃんが来るわけだ。こんなに近かったら話し放題じゃねえか。これで楽しみじゃないはずが無いだろ？」

そういえば机と椅子が増えてる。これも仙石さんの計らいなんだろうか？どっちにしろ、こんなに良い待遇をしてくれてる仙石さんには感謝感謝だな。

キンコンカーンコン

「お、チャイムだ」

「おーいお前らー、席につけー」

チャイムと同時に仙石さんが入ってきた。タバサはまだ廊下で待機してるんだろ。

「よし、今日はお前らに嬉しいお知らせがある！今日からこのクラスに留学生が編入することになった。」

「「「おおー！！」「」」

「よし、じゃあ入ってくれ」

そしてタバサが入ってきて教室が静まり返る。

「シャルロット・エレヌ・オルレアンといいます。今日から皆さんと一緒に学ばせていただきます。これからよろしくお願いします。前はタバサと呼ばれていたもので、そう呼んで貰えたら嬉しいです」

さらに一瞬の静寂。そして……

『うおおおおおっ！！よっしゃああああ！！』

『きゃーーーー！！！！』

「可愛いー！！」

「スゲー！髪が青色だー！」

「ちよっ、センサー！どっから連れてきたんですかー！」

男子全員（俺以外）と女子全員の大合唱。タバサはかなり驚いている。

「ハイハイ、静かにしろお前らー。あ、シャルロットさん。席は平賀の隣だから。行ってくれていいよ」

「はい」

そして俺の隣の席に座るタバサ。座るまで（座ってからもだが）皆の視線がずっとタバサを追っていた。

「な？騒がしいだろ？」

「うん。ここまでとは思わなかった」

俺達はいま、仙石さんの邪魔にならないように小声でしゃべってる。

「おはようシャルロットちゃん。俺のこと覚えてる？」

「おはよう。覚えてる。これからよろしく宮本くん」

「こちらこそよろしく。あ、タバサちゃんて呼べばいいかな？」

「うん」

そしてチャイムがなった瞬間、8割の人間が一斉に席を立ててタバサに群がってきた。話を聞いてもらえない仙石さんがトボトボと教室を出ていったのは見なかったことにした。

「ねーねー、君どっから来たの？」

「シャルロットさんだっけ？どこに住んでるの？」

「その髪の色つてもとからなの？」

「うわー、間近で見たらホントに可愛いなー」

「え・・・えつと・・・わたしは、その・・・」

皆に一気に質問されて、タバサは完全に混乱していた。

「なあ平賀、これって助け舟出さなくていいのか？」

「やつぱ出した方がいいよなあ」

これは流石にタバサが可哀想だな。助けを出してやろう。隣に座っているタバサを呼ぶ。

「タバサ」

「あ、サイト」皆に質問されながらも俺の声は聞こえたようで、タバサはトトトつと小走りで俺の方に来て背中に隠れてしまった。

「おい平賀！シャルロットちゃんを一人占めすんじゃないよ！」

「お前らの目がこええんだよ！タバサが恐がってるだろ！」

「平賀てめえ！またタバサちゃんとイチャイチャしやがって！」

「助け舟出さねえのか？つて言ったのてめえだろうが宮本！」

「それとこれとは話が別だ！死にやがれ平賀ー！」

そして男子（これは俺も入る）の乱闘が始まった。タバサは俺の椅子にちょこんと座っている。

S i d e タバサ

皆の視線が怖い。サイトが覚悟した方がいいって言ったのがいまに分かる。そのサイトは今、宮本くんと殴りあいをしている。

「シャルロットさん、あなたって才人の知り合いなの？」

「え？」

誰だろう？他の人より落ちついてるからまだ話し易いけど、サイトの友達かな？

「あ、私才人の友達で橘春花タチバナハルカって言うの。春花でいいよ。よろしくね」

「・・・よろしく」

「ところで、さっきの質問なんだけど・・・」

「うん。今サイトの家で一緒に暮らしてる」

その瞬間、教室の空気が凍った。サイトたちの殴りあいも一瞬で止んだ。

「え？一緒に暮らしてるの？」

「うん。サイトは私の恋人。だから一緒に暮らしてる」

「ちよっ、タバサ！」

サイトが何か慌てている。何か変なことを言ったのだろうか？

S i d e 才人

マズイ、これはマズイ。タバサが爆弾発言しちゃった。

「才人、今の話本当？」

「ち、ちがつ！それは・・・」

返事に困っていると、タバサが悲しそうに見上げてきた。

「私、サイトの恋人じゃないの？」

若干目も潤んでいる。俺の負けです。ハイ。

「ああ！ご、ごめんタバサ。タバサは俺の恋人だって！」

「・・・良かった」

そう言つてタバサは抱きついてきて俺の制服に顔を埋めてきた。そんなに怖かったのだろうか？

「ごめんなタバサ」

そう言つて頭を撫でてやる。タバサの髪はさらさらしてて、撫でると気持ち良い。・・・てか、タバサはいつからこんなに甘えん坊になったんだろう。

「で、才人。一緒に住んでるってのは本当なの？」

なでなで。

そついやそんなこと言つてたな。

「ああ、本当だ」

なでなで。

「付き合つてゐるのは？」

「それも、本当」

なでなで。

しばらくの沈黙。

なでなで。

「つてか才人、そのなでなでつてのちよつとストップしなさい」

「良いじゃねえか気持ち良いんだから」

なでなで。

「私も、撫でてもらうの・・・好き」

「ほら、タバサもこう言つてゐるじゃねえか」

「・・・ダメだわこの二人。完全に結界張つてゐる」

「まあ、橘。この二人はこの前からこんなだぜ？」

「宮本・・・、あんた二人が付き合ってるの知ってたの？」

「ああ知ってたぜ。まあその時はタバサちゃんに『私はサイトのお嫁さん』って言われたけどな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

呆れ果てる宮本、橘、その他大勢。俺はタバサを離して皆に話す。

「まあ皆、これからタバサと仲良くしてやってくれ」

「それは全然良いけど、・・・シャルロットちゃん狙いだった男子達は残念だったわね」

男子の方に目を向けると、一部（6割ほど）の男子が崩れさっていた。

「タバサに手を出そうとした奴らなんざ知るか。てか、そろそろ授業始まるから皆席につけよ」

しぶしぶながら席につくみんな。ほどなくしてチャイムが鳴って授業が始まる。しかし、朝っぱらから殴りあいをして疲れきった俺と宮本は昼休みまで机とキスする羽目になった。

S i d e タバサ

みんなに質問されてた時は怖かったけど、サイトのおかげで今は静かになってる。そのサイトは宮本くんと一緒になって寝てる。

キーンコーンカーンコーン

4時間目の化学の授業が終わった。今からお弁当を食べる時間なのでサイトを起こそう。

「サイト、起きて。お昼休みだよ」

「・・・ZZZ・・・」

「・・・起きないとお弁当あげない」

「弁当?! いります、食べます、いただきます!」  
今の声で目が覚めたのか、宮本くんも起きた。

「んだようるせえなあー。ん? 飯の時間か?」

「そうらしいな。俺らずっと寝てたのか。・・・まあいいや、飯だ飯」

私の机をサイトの机と引っ付けてサイトの隣に座る。宮本くんはサイトの向かい側に座っている。

「じゃあ食べますか」

「おいーっす。私も仲間に入れてはくれんかねー?」

「よお橘。俺と宮本はいいぞ。いいか、タバサ?」

「大丈夫」

「いやー、すまんねー。シャルロットちゃんと話したくてさー」

昼休みまでの休み時間、私はずっと春花と話をしていた。会って1日も経っていないけど、私は春花が気に入っていた。

少し、キュルケと似ているところもあるから余計にだろう。昼休みのうちにタバサって呼んでもらうようにした。

「んじゃ、食べますかね」

「そうだな。タバサ、弁当くれ」

「はい。こっちがサイトのお弁当」

「さんきゅ」

「あら、やっぱり同じお弁当なのね。美味しそうなお弁当ねー」

「私が作った」

「あ、やっぱり？才人、愛されてるわねー。タバサ、一口もらっていい？」

「構わない」

「ありがと。では・・・美味しい！すごい、タバサ料理上手ね！才人、あんた毎日こんなの食べてたの？」

「ああ。タバサは料理上手だし、俺もタバサの作ったものは好きだからな。宮本に一口も食わせたことはない」

「そうなんだよ、こいつ一回も食わせてくれねえんだよ。死んでもやらん！って言うてくるし」

「当たり前だろうが。タバサの弁当が無いと、俺は1日のテンションが低くなるんだ。誰がてめえなんかにやるか」

嬉しかった。サイトが私の料理がそんなに好きとは思わなかったから。サイトは恥ずかしかったのか、少し顔が赤い。

「あんたたち、ホントにラブラブねえー。見てて退屈しないからいいけどさ」

他愛ない話をしながらお弁当を食べる。予鈴が鳴ったので、机を戻す。

「ごちそうさま、タバサ。いつもありがとっな」

「うっん、サイトが喜んでくれるなら私も嬉しい。だからおあいこ」

「（もう何も言うまい）」

それから午後の授業が始まった。サイトと宮本くんは

「今日はもう無理」

と言ってまた眠ってしまった。

放課後、帰り道

「んー良く寝たー」

「だなー」

「寝過ぎだよ。あんたら今日の授業ずっと寝てたじゃない。よくそ

んなに寝られるね」

「「育ち盛りなもんで」」

今日見ていて分かったけど、サイトと宮本くんは本当に仲が良い。  
今日殴りあつてた時も、強く殴ってるようで本当は二人とも相手が  
痛くならないように殴ってた。

「サイトは勉強嫌いなのか？」

「んゝあんまり好きじゃないなゝ」

「でも、私の国の言葉を教えてるときはイキイキしてた」

「あれは、・・・秘密だ」

「どうして？」

「おおかた、タバサに教えてもらってたのが嬉しかったから、とか  
でしょうよ」

「ぐっ・・・」

「・・・そうなの？」

「えっと、それは・・・その・・・」

「・・・図星」

「あら、やっぱりタバサにはそういうの分かるのね」

「うん。サイトは何か知られたくないことを言われたときに目を合わせなくなる。この前一緒にお風呂に入ったときに気付いた」

その瞬間、私以外の3人の動きが止まった。時間も止まったかもしれない。何か変なことを言っただろうか？

Side 才人

マズイ、マズイ、マズイ！これはマズイ！タバサがまた爆弾発言しちゃった！！しかも今回はさらにヤバイ！！

ゾクッ！

・・・後ろから殺気を感じた。向こうでも何度か感じたことがある種類の殺気。恐る恐る後ろを振り向く。そこにいたのは宮本、いや・・・宮本という名の鬼だった。ぶちキレたマリコル又よろしく、鬼のような形相の宮本がいた。

「平賀」

「は、はい」

「才前八俺ヲ怒ラセタイノカ？」

「い、いや、そんなことは・・・」

「才前ラガ、ラブライチャイチャスルノハイイ。モウ慣レタ。デモナ・・・」

「た、橘。俺達は逃げる。あとのことは頼んだ。それじゃあ・・・」  
「風呂ハ無イダローー！」

壊れてしまった宮本を無視して、俺とタバサは家まで全力疾走で走った。そして、どうにか無事に家までたどり着いた。・・・疲れた。

「はぁ・・・はぁ・・・つ、疲れた。た、ただいま」

「・・・ただいま」

「あら、おかえりなさい二人とも」

『よお、帰ってきたか相棒、娘っこ』

「俺たち部屋に戻ってるから、何かあったら呼んで」

そう言つて二階に上がる。部屋に入ると床に座りこんでしまった。

「タ、タバサ。あんまり宮本を刺激するようなことは言わないでくれ」

「私、何か変なこと言つた？」  
なんてこつた。素で言つてたのか。

「えつとな、こつちじゃ一緒に暮らしてる、とか一緒に風呂に入つた、つてのは、悪い噂にしかないわけだ。だからあんまり言わないでくれると助かるんだけど」

「・・・分かつた」

「よし、タバサは良い子だな」

そう言つて頭を撫でる。

「……子供扱いしないで」

そう言いながらも俺の足の上に乗ってきて、俺に体を預けてきた。  
・ホント、いつからこんなに甘えん坊になったんだろう？

「タバサってホントは甘えん坊だったんだな」

「……ダメだった？」タバサが見上げてきた。……和む。

「いや、全然。むしろ嬉しいな。それだけ俺に気を許してるってことだろ？」

「うん。私が甘えるのはサイトだけ。他の人なんて嫌、サイトだけだから、ずっと……一緒に……い……て……」

そこまで言つてタバサは寝てしまった。今日はいろんなことがあったから疲れたんだろう。

「当たり前だろ。離してつて言つても離してやるもんか」

そして今日1日が終わった。

……次の日、言うまでもなく、俺は宮本に殴られた。それも割と本気で

## o n e d a y (前書き)

ネタが・・・ネタが・・・思い浮かばない。今回は時間をかけた割にはかなりの駄文になっておりますので、先に謝っておきます。それでもいいという方は楽しんでください。感想をお待ちしています。

## o n e d a y

タバサが入学してきてから2、3日たった日の休み時間、宮本が話しかけてきた。

「ちょ、平賀！ここからがいいところなんだからしつかり聞けつての」

「すまん、眠い。次播磨さんの授業だしそのまま寝かせてくれ」

そう。播磨さんの喋りはかなり聞き辛くて、声もあまり大きくないから子守唄にしか聞こえない。例えるならば、お経を唱えるお坊さんといったところだ。

「まあ確かにあの人の授業は眠くなるもんな」

実際あの人の喋りは殺人級で、勉強熱心なタバサでさえうとうとしていたくらいだ。普通の人が耐えられる訳がない。

「だろ？だから寝させてくれ」

今日も今日とてテンションの高い宮本を放置して、俺は机に突っ伏した。

「うわ、お前友達思いじゃねえのな。俺の武勇伝を聞かないなんて友としてどうかと思いますよ？」

「てかさー、最近気づいたんだけど。女の名前と場所変えればお前の武勇伝てほとんど同じじゃねえか」

宮本はかなりの女好きで、綺麗な人を見かけると迷わず声をかけるという性格をしている。

「まあ、それはそれとしてだな。潤ってるお前と違って俺は新鮮な日常を求めて日々努力している訳ですよ」

・・・まあほとんど成功することはないのだが。

「おっと・・・嫁さん来たぞ宮本」

「んあ？」

「宮本君。サイト起きてる？」

透き通るような聞き慣れた声に顔を上げる。

「どうしたんだシャルロット？」

橘と話していたタバサが帰ってきたようだ。宮本がタバサの後ろでニヤニヤとこちらを見ている。向こうにいた時はあまり表情を変えなかったタバサだったが、こちらに来てからは表情をよく出すようになった。しかし俺や宮本、橘や両親以外にはほとんど無表情に見えるようだ。まあ、確かに変化するっていつても少しだけだからな。・・・周りから声が聞こえる。

「おーおー、見せつけやがる」

だの

「いつもベツタリよねあの二人」

だの

「ちくしょう！平賀のどこが良いんだ？！」

とか

「・・・やっぱり、平賀を殺っちまうか？」

だの、まあうるさいことうるさいこと。てか最後のは物騒過ぎるだろ。声が本気だったぞ？しかしタバサは周りの声など気にしない。流石というべきだな。

「何かあったのか？」

「サイト。今日の放課後空いてる？」

「あー放課後か・・・ちょっと待ってくれ」

上半身を机からのっそりと持ち上げて携帯を取り出す。そして携帯を操作して予定を確認する・・・フリをする。

「・・・予定あるの？」

タバサがこちらを見ている。

「んーと、もう少しお待ちを・・・」

タバサの細い指がそわそわと動いている。ここで断ったらどんな反応してくれるんだろう？そう。とだけ言っただけでもないフリをし

て橋のところに戻るかもしれない。しかし確実に、どよん。とした空気を纏うに違いない。

「（ああ、それはそれで見てみたい気もするな）・・・あー、宮本と予定入ってたような気がするな」

「あれ？予定なんてあつたっけ？」

「・・・そう」

いきなりボ口を出した宮本の言葉には気づかなかつたらしい。タバサは心持ち沈んだ声でそう呟いた。

「（やつぱり可愛いな）」

この顔も周りからは全く変わってないように見えるんだろう。

「（タバサのやつ。思いつきりションボリしてるな）」

もし猫だったら耳がしおれて、尻尾がペタンとなってるだろう。少し罪悪感を感じるが、同時に良いものを見れたという達成感もあった。しかしあんまりやりすぎると後の仕返しが恐ろしい。

「ん、ああ。ごめんごめん。勘違いだった。大丈夫、空いてるよ」

「本当？」

その一言でタバサの声はとたんに明るくなった。擬音を付けるなら、パアアア！って感じに。

「じゃあサイト。放課後に商店街に行こう?」

「ああ、分かった」

「じゃあ私、ハルカのところに戻るから」

そう言つて橋のところに戻つていった。タバサはよく橋と話をして  
いる。あまり人に関わろうとしなかったタバサには良い傾向だ。・  
・寂しい訳じゃないぞ。

「なあ平賀。一つ聞いていい?」

「あー、何だ宮本」

「お前、いったいどんな手使つたんだ?」

「・・・何の話だ?」

「あんなに可愛い子がお前に懐くなんて有り得ねえだろ」

酷い言われようだ。俺に懐くのに可愛い可愛くないは関係ないだろ。

「それに見た限りじゃシャルロットちゃん、最近まで表情を表に出  
すなんて無かつたんじゃないのか?」

流石だ。よく見ている。宮本は女の子のことになれば急に鋭くなる。

「そうだな。俺ん家にすみ始めるまではほとんど無表情だったな」

「そんな子をお前はどやって落としたんだ?参考までにお聞きし

たいですね〜平賀先生」

「別に。特別なことはしてねえよ」

しているかもしれないが、言っても分かるはずが無いので口には出さない。

「ちえつ。つまんねえな〜・・・なあ平賀知ってるか？」

「・・・今度は何の話だ？」

もう眠る気も失せてしまった。

「シャルロットちゃんが入学してからな、毎日人氣が右肩上がりで急上昇らしいぜ。これはうかうかしてられませんかあ」

「へえ、そんな話になってんのか」

「け、余裕だね、平賀センセイ。ゴチソウサマ。付き合ってる者の強みですなあ〜」

やってられんわと言わんばかりに宮本は大げさなため息をついた。

余裕と言われても困るが、俺の鼻屑目を除いたってタバサが綺麗なのは確かだ。日本人では有り得ない髪の色に、誰が見ても可愛いと思える顔立ち。透き通るような白い肌。

体格はまあ・・・気にしない。

何よりお姫様だ。他の女子とは纏っている空気が全然違う。そりゃ人氣も上昇するだろう。気にしてもしょうがない。

「てか平賀、お前もなんだがな」

「あ？」

「雰囲気変わったよな。身長も伸びてるし、何か大人っぽくなった」

「そりゃあ向こうで何度も死にそうな目に合えば雰囲気も変わるだろう。それに向こうで過ごした一年がこっちでは一日しか経ってないんだから、俺はみんなより年上ということになる。身長だって伸びるさ。」

「実は最近お前も人気あるんだぜ？」

「ああ？んな訳ねえだろ」

「いやいや、一年生の間でなかなかの人気っぷりですよ？シャルロットちゃんも大変だねえ」

「・・・興味ねえな」

顔をしかめて言ってみたが、全くのムダだった。  
「ニヤニヤしながらこっちを見ている宮本に俺は口を開いた。」

「俺はシャルロットが好きでいてくれたらそれでいいんだよ。まあだからって、周りに嫌われるのは嫌だけだな」

宮本が心底呆れたような顔でこっちを見てきた。

「はいはい。ったく、堂々とのろけやがって」

そう言つて宮本は席に戻つた。

「屋上で食べるなんて初めてだな」

「そうなの？」

「ああ、今までは教室か食堂だったからな。新鮮だな」

「・・・風が気持ちいい」

俺とタバサは屋上で弁当を食べている。橘と宮本も誘つたのだが、

「「野暮はいたしません！」」

と言つて断られた。食事くらいで大袈裟な・・・

「・・・味大丈夫？」

「ああ、美味しいぞ。いつも同じ返答で悪いけど、やっぱりシャルロットの料理は美味しいと思うぞ」

「・・・良かった」

嬉しそうに少しでも微笑む顔を見ると、どうしてもこちらも頬が緩む。

それを誤魔化すように頭を撫でる。

タバサは俺の肩に頭を預けて、猫のように目を細めている。

「・・・幸せ」

「ん？何か言ったか？」

「何でもない・・・」

「・・・そうか」

さらさらと撫でる度に指から逃げる髪の毛は、背景の空と同化しているようで幻想的だ。

「じゃあそろそろ戻るか？」

「ん・・・もう少し」

予鈴が鳴っているが、タバサの頼みなら仕方ない。

「分かったよ」

タバサも少しずつだけど学校生活に慣れてきた。ぎこちなくではあるが、クラスの皆とも話せるようになった。それがとても嬉しい。

「・・・満足した」

「よし。じゃあ戻るか」

「うん」

放課後、タバサの誘い通りに商店街に向かっている。何故か今回は橋も宮本もついて来なかった。

「そついえば聞いてなかったけど、商店街に何しに行くんだ？」

「ハルカから美味しい和菓子のお店ができたって聞いたから」

なるほど。よく食べるタバサらしい実に分かりやすい理由だ。

「サイト」

「ん？」

タバサがそつと寄り添ってきた。それが合図だと分かったから、手を少し浮かせて隙間を作る。

そこに自分の右手をすべりこませたタバサがこつちを見上げてきた。

「どうした？」

「何か良いことあった？」

「いや、いつもどおりだけど。なんで？」

「いつもだったら恥ずかしがってこんなにすぐに腕を絡ませてくれない」

「そついうことか。まあそれは今も正直恥ずかしいんだけど・・・」

「ならどうして？」

「シャルロットが腕を組みたいってのを断る訳にはいかないだろ」

まあ恥ずかしいけど、その分タバサの嬉しそうな顔を見れるだけで十分おつりがくるしな。

「・・・着いた」

そこにあつたのは、あまり大きくはないが最近できたというだけあつて綺麗な外装をしている和菓子店だった。

「へえ。こんなところにできてたんだな」

「お客さんいっぱい」

「確かに和菓子店には珍しいくらい客がいるな。まあとりあえず入るか」

「うん」

まあ結果的に言うと・・・食べれなかった。どうやら全てのお菓子を手作りで作っているらしく、個数がかなり少ない。だから俺たちが店に入ったときにはほとんど残っていなかったらしい。

「・・・」

「残念だったなシャルロット」

「サイトと一緒に食べたかった・・・」

かなり落ち込んでる。どうにかならんものか。

「そんなに落ち込むなよ。また休みの日に一緒に行こうぜ?」

「……………うん」

少し元気にはなったが、やはりテンションが低い。何か話題を変えないと…………

「そういえば、シャルロットと橘っていつもどんな話してるんだ?」

これはけっこう本気で気になっていることだ。何せ二人で話している途中で橘がニヤニヤしながら俺を見てくる時があるのだ。気にならないはずがない。

「……………教えない」

「どうして?」

「ハルカに口止めされてる」

先手を打たれていた。しかし教えないと言われると余計に気になる。

「教えて」

「ダメ」

「どうしても?」

「ダメ」

「・・・・・・・・頭撫でるの禁止」

ピクッ

ぼそりと呟いた言葉にタバサが面白いように反応した。

「・・・・・・・・ズルい」

瞳に涙をためてこつちを睨んできている。さすがにやりすぎたかとも思ったが、頭を撫でる程度で大袈裟な、とも思った。

「泣くほど辛いのか？」

「（コクッ）」

まあ俺もタバサの頭を撫でるのは好きだから、俺としてもこの罰はいただけない。

「しょうがない。言いたくないならいいよ」

「ごめんなさい」

しゅん、となつてしまったタバサを見ると保護欲が掻き立てられた。抱きしめたくなつたが、公衆の面前でする訳にもいかない。

「まあ、とりあえず帰るか」

「ん」

帰ったらおもいつきり抱きしめて頭を撫でてやろうと思いつながら家

に帰った。

しかし頭の中が幸せ一色だった俺は忘れていた。  
．．．．．テスト  
がすぐそこまで迫っていることに。

## ミニ外伝 ルイズとキュルケ（前書き）

暇潰しに適当に書いてみました。かなりグダグダの文章になってます。申し訳ありません。

## ミニ外伝 ルイズとキュルケ

「暇ね」

キュルケは今日何度目か分からないため息を漏らした。

「ため息ばかり吐くの止めなさいよ。こっちまで鬱になるじゃない」

ルイズも口ではそう言っているが、自分も内心ため息をついていた。

「だってしょうがないじゃない。からかう子がいなくなったんだから」

「・・・あなたのタバサとサイトの認識ってそんなだったの？」

「冗談よ（半分くらい）。でも、あの二人がいなくなっただけで、随分寂しくなったわね」

「まあね。いたらいたらでイライラしてたけど、いなくなったら物足りないわね」

タバサと才人が帰ってから一ヶ月がたとうとしていた。タバサと親友だったキュルケや、才人のご主人様だったルイズは最も近い人間がいなくなったので、立ち直るにも少し時間がかかっていた。

「ねえルイズ。あなたの虚無でどうにかあの二人に会えないの？」

「世界扉で送ってあげるわよ？帰って来れないけど」

「・・・それはちょっとイヤね。ダーリンもどうにかして行き来できるように研究してるけど、あんまり進んでないのよね」

「まああの二人だから、私たちのことを忘れて毎日甘々ラブラブな生活送ってんじゃない？」

「・・・それはあり得るわね」

二人が聞いたら全力で否定しそうだった。誰も相手にしないだろうが。

「まあ生きてるうちには行き来できるようになりたいわね」

「そうね。まあヨボヨボになって会うのはイヤだけどね」

「そうね。感動の再会が台無しになりそうなものね」

「「・・・はあ」」

しょっちゅうこんな会話をする二人は、タバサと才人がいなくなったことで前よりもよく話をするようになっていた。なんだかんだ言っても、二人は仲が良いのだろう。

「タバサたちが結婚する頃には行けるようになりたいわね」

キュルケがいつもの軽い調子ではなく、真面目な口調で言った。親友の晴れ姿は見逃したくないのだろう。何割かはからかう為というのも含まれているだろうが。

「タバサの晴れ姿・・・想像つかないわね」

ルイズの言葉にキュルケも頷く。服装などに気をつかっていなかったタバサが、花嫁姿をしているのはどうしても思い浮かばないのはある意味当然であった。

「ま、どっちにしても向こうに行けるようにならないことにはどうしようも無いはね」

「そうね。ダーリンには頑張ってもらわないと。私もちょっと何か手伝ってくるわ。じゃあねルイズ」

「あんなが行っても邪魔にしかならないと思うけど……まあ頑張rinaさいキュルケ」

そしてキュルケと別れたルイズは、

「それはそれとして……使い魔どうしようかしら」

それがルイズの目下の課題であった。

## テスト前（前書き）

久しぶりの投稿です。

この小説を読んでくださっていた皆さん、遅れて本当に申し訳ありませんでした。

これからはできるだけ更新していきたいと思いますので、よろしくお願いします。

皆さんのご感想をお待ちしています。

## テスト前

・・・まずい、非常にまずい。。一週間後にテストがあることを完全に忘れていた。タバサが一言も言わなかったから気にしていなかったけど、タバサは入学して日も浅いからテストを受けなくてもいいってことをすっかり忘れていた。

「・・・まずい」

「サイト大丈夫？」

全然大丈夫ではありません！

「・・・・・・サボるか」

「ダメ」

ですよー。ちなみに今日は土曜日（午後3時、昼まで寝てた）なんだが、休むところではない。テストが火曜日から始まるからだ。

「そうは言ったってテスト勉強なんて全然やってないし」

『大変だねえ相棒。娘っこに勉強教えてもらったらいいんじゃないのか？』

「いや、それこそ無理だろ。」

入学したばかりのシャルロットに教えられるって、俺どんだけバカなんだよ」

「サイト」

なにやらシャルロットが熱の籠もった目でこちらを見ている。

「いやいや、流石に今回は無理だって。シャルロット古典とか分からないだろ？」

「……うん」

そう言うときシャルロットは俯いた。そんなに教えたかったのだろうか？

「あゝ、じゃあ数学とかで分からないところがあったら教えてくれるか？」

「あ……うん」

今度は勢いよく頷いた。雰囲気が一変してとても嬉しそうだ。

実際、魔法学院でも数学に近いものを教えていたらしく、シャルロットは数学がかなり得意だ。流石は優等生。

「さて、そろそろ勉強始めますか」

そして椅子に座って机に向かいあふ。シャルロットは教科書を開いて、自分の勉強を始めた。

カリカリ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カリカリ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カリカリ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カリカ・・・

「ああー！もう無理！集中力保たねえ！」

急に叫んだから、シャルロットの体がビクツと震えた。

『いやいや、早すぎるだろ相棒。まだ一時間も経ってねえぞ？』

「そんなこと言っても無理なもんは無理なんだよ。だいたい、俺は今までテスト勉強なんてほとんどやったことないんだから集中力が保つはずねえんだよ」

『そんなもんかねえ』

「そんなもんなん「サイト」ん？」

シャルロットの方を振り向くと、シャルロットが杖を掴んでいた。

「・・・びつくりした」

そう言つてシャルロットは杖を振り上げた。

あ、これヤバイ。と思つたときにはもう遅かつた。

ゴン！

「っ！・・・つてえ」

その時、どこぞの風韻竜が悲痛な鳴き声をあげたのは余談である。

「おどかさないで」

「悪かつたつて。だからもう杖を振り上げないでくれ」

「・・・分かつた」

そう言つてようやく杖を下ろしてくれた。シルフィードはいつもお仕置きで、こんな痛みを味わつてたんだな、とシルフィードに同情した。

『あいぼー。おーい、あいぼー』

「ん？ああ、どうしたデルフ？」

『いや、それはこっちのセリフだつて。急に遠い目しちまうし、遂に壊れたのかと思つたぜ相棒』

どうやらかなり危ない感じだつたらしい。殴つた負い目を感じているのか、シャルロットも心配そんな顔で覗きこんできている。

「……大丈夫？」

表情こそ変わっていないが、声に焦りが感じられるので、かなり心配しているのが分かった。

「ああ、こんな痛み大したことねえよ。心配してくれてありがとな」

頭を撫でながらそう言うと、安心したのか気持ち良さそうに目を細めている。

「しかし、どうしたもんかなー。全然勉強する気起きねえよ」

『しばらく娘つこと話でもして、気分転換したらいいんじゃないか？娘つこもさつきから寂しそうにしてたしよ。ちようど良いんじゃないかねの？』

「……そうなのか？」

「（コクコクコク）」

寂しかったか聞いたら思いっきり首を縦に振ってきた。

「よし、じゃあ話でもすつか。てか、シャルロットも寂しかったんなら言えよ？」

「でも勉強してた」

勉強してたから邪魔はしなくなかったらしい。正直、邪魔してくれた方がありがたかったりするのだが、口には出さない。

「バカ、勉強なんかよりシャルロットの方が優先だって。だから寂しかったりしたら言えよ？」

「……うん」

するとすぐに抱きついてきて顔をグリグリと押し付けて甘えてきた。何度やられてもこれは慣れない。シャルロットが可愛すぎて毎回毎回萌え死にそうになってしまう。

しばらく顔を押し付けていたが、満足したのか顔を離して体の向きも変えて今度は背中を預けてきた。俗に言うあぐら椅子つて感じた。「さて、何の話しようか……怪だ「ダメ」だよなあ。あれは夜にやってこそ意味がある「もっとダメ」……」

シャルロットはお化けの類が苦手らしいけど、まさかここまで嫌いだとは。今日の夜、怪談話でもしてみよう……。

「じゃあシャルロットはどんな話がいいんだ？」

「怖くない話」

「………デルフ」

『どうした相棒』

「なんか話題無いか？」

『じゃあ相棒が娘つこに告白したときの話なんてどうだい？』

「それを喋ったら壊すからな」

あれは思い出したくない。

『やっぱり相棒だよな。いざ言うぞって時に言葉噛むんだもん。流石っていうかなんていうか……』

「黙ってる」

脅しにも気にした風もなく喋り始めたので鞘に入れて無理矢理黙らせた。

「まったく、ペラペラ喋りやがって」

「……でも」

「ん？」

「言ってくれたとき、嬉しかった」

「あゝ。でも噛んじまったしな。今思い出してもカッコ悪い」

あれは恥ずかしかった。言った瞬間に自虐の渦に取り込まれたからな。

「そんなことない。サイトはいつでもカッコいい。……たまにうつかりしてるけど」

なんかシャルロットの頭の中での俺はかなり美化されてないか？と疑いたくなるほどだ。ていうか本当にカッコいいのか？今までモテたことなんてないんだけど……ダメだ。言ってる悲しくなってきた。

「・・・ト、・・・を・・・てくれて・・・とう」

「え？何か言ったか？」

落ち込んでてまったく聞いていなかった。するとシャルロットに思いつきり睨まれた。

「・・・・バカ」

「ごめん。だからもう一回言ってくれないか？」

「・・・恥ずかしい」

「そこをどうにか」

するとこつちを見上げて頬を染めながら口を開いた。

「・・・私を好きになってくれてありがとう」

「・・・あー・・・」

自分から聞いたというんだけど、滅茶苦茶恥ずかしい。いや、嬉しいんだけど・・・他に人がいなくて良かったと本気で思う。剣はいるけど。

「あらあら、若いつていいわねえ。羨ましいわ」

「「っ！！」」

二人で勢いよくドアの方に振り向くと、母さんがニヤニヤしながら立っていた。このおばさん、いつからここにいやがった？！

「サイトゥ、母さんに対してその言い方はないんじゃないの？」

ゾクッ！

背中に寒気を感じた。オカンの悪寒・・・いかん、パニくってる。

「か、母さん。いつから・・・」

「勉強なんかよりシャルロットの方が優先だつてところからよ」

なんてこった、ほとんど全部じゃねえか！鞆に収まっているデルフがカタカタと震えている。こいつ、気付いてやがったな。

デルフを引き抜いて思いっきり睨みつける。

「お前、気付いてただろ？」

『ああ』

「何で言わなかった？」

『いや、面白そうだったし。それに俺っち途中から鞆に入れられてたし』

・・・とりあえずこいつは後でお仕置きするとして、目下の問題は目の前でニヤニヤしながらこっちを見ている、平賀母四じゅ『バシッ！』いてえ！

スリッパで頭をかなり強めに殴られた。

「私はまだ30歳よ」

バレバレな嘘について俺を睨む母さん。顔は笑っているが、目は笑っていない。むしろなんか目が据わってる。てかさつきから心を読むな！

「あら、ところどころ口に出してるわよ？」

「・・・マジで？」

「（コクコク）」

シャルロットに聞くと、首を縦に振って肯定してくれた。俺、口に出してるのも気付かないってどんだけパニくってたんだよ。

「ところで才人」

「・・・何でしょう、お母さま」

「才人にそんなこと言われると気持ち悪いわね」

自分の息子を気持ち悪いとか言いやがった。

「まあいいわ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど。ああ、拒否権なんて無いからそのつもりでね」

「・・・何だよ」

今の母さんには逆らえる気がしない。

「いやね、どいう風シャルロットちゃんに告白したのか教えて欲しいのよ」

「無理」

いやいやいや！それだけはホントに無理だから！

「教えなさい？」

「無理」

「教えろ」

「だから無理だって！」

すると母さんは舌打ちして視線をシャルロットの方に向けた。

「シャルロットちゃん。教えてくれない？」

それをシャルロットは首を横に振って拒否した。

「ダメ。あれは私とサイトだけの思い出。たとえ誰でも教えられない」

本当はデルフもいたんだけどシャルロットの中ではカウントされなかったようだ。

「気になるわね。でも無理に聞いてシャルロットちゃんに嫌われるのもね。」

俺には嫌われてもいいのか、と言いつつになつたがどうにかこらえる。

「ていうか何でここにいるんだ？」

「あ、そうだったわ。」

手をポンと叩いて母さんが言った。

「もうすぐ夕飯だから呼びに来たのよ」

そうか、もう夕飯か。……え？いま何と？

「……母さん、今何時？」

「いや、時計あるんだから自分で見なさいよ」

母さんのもつともな指摘を受けて視線を壁時計に向けて、固まった。時計は短針が6と7の中間、長針が6をさしていた。6時半である。

「え、もうこんな時間？」

気分転換でシャルロットと話し始めてから3時間以上が経過していた。気分転換どころか、勉強の方がついでみたいな感じになってる。

「まあ、そういうことだから。あと10分くらいしたら下りてきなさい」

そう言って母さんは階段を下りていった。俺はというと、テスト勉強のことを考えていた。

「（今日はもう無理だな。まったくやる気が起きねえ）」

勉強が嫌いな人には分かるだろうが、一回そんなことを考えると次の日も同じようなことになるという、恐ろしいテスト勉強のデフレスパイラルだ。

「とりあえず下に行くか」

膝の上に乗っていたシャルロットを持ち上げて立たせた後、俺も立ちる。

「行こうぜシャルロット」

いつもならここで頷くなりなんなりしてくれるんだが、今日は違った。両手をこっちに伸ばして見上げてきている。

「どうした？」

「……抱っこ、して」

「……」

え、何これ？何で今日に限って抱っこなの？あれか？確かに寂しかったら言えとは言ったけど、シャルロットは甘えてもいいっていう風に受け取ったのか？などと頭の中で考えていると、黙っているせいで怒っていると勘違いしたのか、シャルロットの眉尻が下がった。

「・・・・・・・・ダメ？」

「いや、ダメじゃねえよ。ただびっくりしてただけだから。じゃあ持ち上げるぞ」

「うん」

嬉しそうに頷くシャルロットを持ち上げて抱っこする。首の位置にシャルロットの頭がくるので、髪が首に当たってくすぐりたい。

「落ちないようにちゃんと掴まってるよ？」

「分かった」

シャルロットがしっかり首に手を回してきたのを確認して部屋を出る。ここで問題に気付いた。階段だ。

「シャルロット。一回降りてくれ」

「いや」

「でも階段があるからさ。頼むよ」

階段で滑ってシャルロットが怪我でもしたら大変だ。

「・・・・・・・・分かった」

そう言うと、なんとか降りてくれたので二人で階段を下りる。下り終わるとまたすぐに手を伸ばしてきた。

「抱っこ」

「はいはい」

もう諦めてシャルロットに従うことにした。ここで断って機嫌が悪くなるのも嫌だからな。シャルロットを抱っこしてリビングへと向かう。ソファでくつろいでいた父さんがこつちを見ると、羨ましそうな視線を向けてきた。

「なあ才人。ワシにも抱っこさせてくれんか？」

「母さんにもやってろよ」

「いやいや、シャルロットちゃんだからこそ意味があるんだ。だからな？頼む」

「いや、俺にそんなに頼まれても。シャルロットの許可がないと無理だろ」

「そうだったな。シャルロットちゃん、抱っこしてもいいかな？」

シャルロットはしばらく迷っていたが、構わない、と言って頷いた。

「よし！才人、今代われ！すぐ代われ！」

そう叫んでくる父さんに軽く引いた。このオッサン、目が血走ってやがる。こんなのにシャルロットを抱っこさせて大丈夫か？

シャルロットを受け取ると、とたんに父さんの顔がふにやけた。ロリコンという単語が頭の中に浮かんだが、それを振り払う。あれは親バカだ。ちよっと容姿が幼い娘を可愛がるただの親バカだ。そう

結論付けて意識を戻すのと、父さんの爆弾発言はほぼ同時だった。

「いやー、シャルロットちゃんは軽いな。母さんとは大違いだ！ハッハッハ！」

あ、ヤバイ。

「シャルロット。今すぐこっちに来い」

「ん」

意識が異世界に旅立っている父さんの腕から抜け出してこっちにシャルロットが来た後、鬼が降臨した。

「……あなた？今なんて言いました？」

全てを威圧するような声がリビングに響いた。これにはあのルイズでも勝てないだろう。その声で異世界から帰還した父さんは凍りついていた。

「あ、母さんこれは……」

「いま、な・ん・て・言・い・ま・し・た？」

「ひいつ！」

「……シャルロット、離れるぞ」

「うん」

シャルロットを連れて急いでリビングから出る。その後家中に父さんの悲鳴が響いた。

それからは特に何もなく夕飯を終えた。父さんの魂が抜けていた気がするが、自業自得だ。同情の余地はない。

風呂（ちゃんと別々に入ったぞ！）も入って今はみんなくつろいでる

「そついえば才人、テスト勉強は進んだの？」

「うっ」

「進んでないのね」

「うっうっ」

「はあ、シャルロットちゃんと別々の部屋にした方がいいのかしら？」

「それはダメ」

すかさずシャルロットが反論する。

「分かってるわよシャルロットちゃん。だから才人にはテスト頑張ってもらわなきゃいけないのよ」

ね？と言ってこっちを向く母さん。反論は認めないと顔が語っていた。・・・今日、母さん怖いな。

「ガンバリマス」

「片言なのが気になるけど、まあいいわ。頑張りなさい」

「頑張つて」

明日は真面目にやろう。うん。そう心の中で決めて頷いた。

「よし、じゃあ明日の為に今日はもう寝るか」

「あら、もう寝るの？おやすみ」

「おお、寝るのか才人。おやすみ」

ようやく回復した父さんと母さんにおやすみと言って自分の部屋に行く。てつきりシャルロットもついてくると思っていたので、振り向いてもいなかったことに若干驚いた。

シャルロットを探してリビングの方を向くと、俺についてこようとしたところで、何故か母さんに掴まってじたばたしていた。今日の母さんは怖いからな。俺では助けられない。頑張ってくれシャルロット。

「御愁傷様」

誰にも聞こえないように合掌しながらそう言ってベッドに入った。翌日、母さんと一緒に寝た（寝さされた）シャルロットに睨まれたのは余談だ。

## テスト終了（前書き）

いつも更新が遅くて申し訳ありません。この作品を読んでくださっている皆さん、本当にすいません。

今回はコメディ感が強いです。

楽しんで読んでいただければ幸いです。

皆さんの感想をお待ちしています。

テスト終了

キンコーンカーンコーン

「・・・やつと・・・やつと終わった」

そう呟いて机に突っ伏したサイト。そう、今のチャイムで2日間のテストがようやく終わりを迎えたのだ。ちなみにシャルロットは受ける必要がないので学校に来ていない。

「ひ、平賀。どうだった？」

前の席の宮本が話しかけてきた。声から察するにこいつは見事に撃沈したのだらうと判断した。

「いや、いつもよりテスト勉強頑張ったからな。今回はまだなんとかなりそうだ」

「なん・・・だと・・・？お前、テスト勉強やったのか？いつも俺と一緒に赤点すれすれだったお前が勉強？何かの間違いだらう？」  
「ひどい言われようだが間違っているわけではないから反論できない。しかし、今回の俺はいつもとは違う。なぜなら・・・」

「シャルロットに頼まれたんだよ」

「頼まれたって・・・テスト勉強をか？」

「テスト勉強とテストの両方だな」

宮本は頭の上に？マークを浮かべている。

「何でシャルロットちゃんがそんなこと頼むんだ？関係無いじゃねえか」

俺は宮本に説明した。テストの成績が悪かったら部屋を別々にされてしまうこと。部屋を別々にされるのは嫌だから、テストを頑張るように言われたこと。

「まあ、そういうわけだからテスト勉強を頑張ったわけだ」

説明し終えて帰りの準備を始めると、頭上で宮本がため息をついたのがわかった。

「平賀、お前ホントに羨ましいな。風呂が一緒なだけじゃなくて寝るのも一緒だよ」

「俺は別に一緒じゃなくてもいいんだけどな・・・」

「平賀、そんなこと言っているとシャルロットちゃんに怒られるぞ？『嫌なの？』とか言って半泣きになってそうじゃねえか」

それはありえる。というか今までもそのやり方でなんだかんだで許してきたのだ。

「なあ、俺ってシャルロットに甘いと思うか？」

「は？今更それ言う？」

宮本は心底信じられないという感じでこっちを見てきた。

「甘いなんてもんじゃねえぞ。ただ甘だ。糖度計が振り切れるくらい甘いぞ」

なんだ糖度計が振り切れるくらいって。むう、少しシャルロットへの接し方を変えた方がいいのかもしれない。

「あ、だからって急にシャルロットちゃんの接し方を変えるんじゃねえぞ？そんなことしたら嫌われたと思われてもおかしくねえからな」

こちらの心と呼んだかのように釘を刺してきた。

そういうもんなのか？いや、確かにシャルロットならありえるかもしれない。

「そうだな。あくまで少しずつだな」

「ま、頑張れや。（どうせ無理だと思うけどな）」

「・・・何か言ったか？」

「いんや、なんにも」

限りなく怪しいが聞いても無駄だろう。

「まあいいや。じゃあ俺帰るわ。シャルロットが待ってるからな」

「お、じゃあ俺も行こうつと」

「どこに？」

「決まってるじゃん。お前ん家だよ」

意味が分からない。何で急に俺ん家なんだよ。

「シャルロットちゃんがいるからな」

心の中を読んでんじゃないやねえよ。

「虚無に不可能はない！」

なんか電波受信してるし。……ん？虚無？……まさかな。いくらなんでもそれは無い……はず。多分無い。あつて欲しくない。

「……あれ？今なんか桃色の女の子が見えたぞ？」

「気のせいだ。忘れる。忘れてくれ」

主に俺のために。

「まあいつか。それより、早く帰ろうぜ。腹減ったよ」

「それが理由か」

なんとも宮本らしい理由だ。まあ、俺も腹は減ってきてるし、早く帰りたいってのは確かだな。

まあ、昼飯を作るのがシャルロットだったらこいつには一口もやるつもりは無いが。

「とりあえず帰ろうぜ」

そして帰路についた。

S i d e シャルロット

「シャルロットちゃん。そこのお肉、叩いて伸ばしてくれる?」

「わかった」

私は今サイトのお母さんとお昼ご飯の準備をしていて、ちょうど用事を頼まれた。

棒でお肉を叩く。これは慣れてる。シルフィードのお仕置きで何回もやったことがあるから。

・・・いまシルフィードの鳴き声が聞こえた気がしたけど、気のせいにしておく。気のせいだったら気のせい。

「できた」

「ありがとっ」もう休んでていいわよ。もうすぐしたら才人も帰ってくるはずだから、迎えに行つてあげてね?」

「当然」

それだけは譲れない。それは私だけの特権。

「ふふっ。じゃあよろしくね?」

「うん」

『娘っこ。俺も連れてつてくれよ』

「構わない。けど、どうして？」

『俺最近出番がなかったからさあ。ここらで出とかないと忘れられそうだよ』

出番てなんのことだろう？

「よく分からないけど分かった」

『矛盾してんな』

「気にしない」

デルフリンガーを膝の上に乗せてソファーに座ってサイトが帰ってくるのを待つ。

今のデルフリンガーは元の姿だから切れ味が良い。こちらの世界だったら危ない。錆びた剣になったほうが安全だと思う。

サイトが帰ってくるまでテレビを見る。本を読もうかと思ったけど手元に無かったから断念。

それにしても平日のこの時間はあまり良い番組が無い。

15分ほど見てたら玄関に人の気配がした。

この感じは・・・サイト！

すぐにデルフリンガーを持って玄関に走る。

デルフリンガーを持ってるからいつものように抱きつくのは無理。だから頭を撫でてもらう。

そして玄関の扉が開いた。

S i d e 才人

なんだこれ？

玄関の扉を開けたらデルフを両手で持って走ってくるシャルロット。  
これなんのホラー？俺何かしたっけ？

後ろの宮本も完全に固まってる。

俺、シャルロットに斬られんの？

呑気にそんなことを考えてたらいつの間にかシャルロットが目の前にいた。

「おかえり」

「あ、ああ。ただいま」

どうやら斬られることはないようだ。まあ、普通に考えてあり得ないんだが。

帰ってきた途端に彼女に斬られるとか洒落にならねえよ。

「サイト」

「ん？」

「頭撫でて」

「ああ、分かった」

すぐに返事をして優しく頭を撫でる。シャルロットは目を細めて嬉しそうにしてる。いかん、かわいい。

「シ、シャルロットちゃん。それは？」

ようやく復活を果たした宮本が開口一番聞いてきた。

まあ、可愛い女の子が剣を持って走ってきたらそりゃビビるよな。しかも剣は本物ときた。宮本にそれが分かるはずはないが。

「剣」

シャルロットが短く答えた。

「な、何で平賀の家に剣があるんだ？」

このままだとボロが出そうだな。デルフも喋らないようにしてるけど、こいつおしゃべりだからな。いつ喋りだしてもおかしくない。

「おもちゃだよ。それより昼飯食うんだろ？なら早く中に入ろうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

あまり納得はしてないが腹の方が優先順位が高かったのだろう。素直についてきた。

シャルロットには俺の部屋にデルフを置いてきてもらった。

「あら、宮本君じゃない」

「あ、こんちわッス」

リビングに入ると母さんが宮本に気付いた。そっぴや今更だけど、宮本が入って飯の量足りんのかな？

まあ、大丈夫か。たくさん作ってるだろうし。主にシャルロットのために。

「ちょうど今お昼ご飯できたんだけど、食べてく？」

「はい。もともとそのつもりで来たんで」

図々しいことこの上ない。・・・そうだ。

「シャルロット。昼飯は誰が作ったんだ？」

「サイトのお母さん。私は助手」

メインは母さんということか。なら別に宮本が食っても問題はないな。

「あらあら、図々しいわねえ」

それでも嫌な顔をしない母さん。きっと大人数で食べるのが好きなんだろう。

「それじゃあ食べましょうか」

母さんの言葉で全員が椅子に座る。

「」「」「いただきます」「」「」

「ふう、食った食った」

宮本がおっさんみたいな声を出してカーペットの上に仰向けに倒れた。

こいつほど他人の家でここまで遠慮の無い奴はいないと思う。

「サイト」

「ん？」

ソファーに座って漫画を読んでたらシャルロットが近寄ってきた。やっぱり斬られるのか？

「膝」

そういうことか。

「ほらよ」

すぐに膝から漫画を離して膝の上を空ける。膝が空いたのを確認したシャルロットが膝の上に乗ってきた。

「重くない？」

「全然。むしろ軽いくらいだな」

「よかった」

最近は膝の上に乗るたびにそんなことを聞いてくる。気にしてんのかな？というかシャルロットは軽すぎるくらいだ。もう少し重いくらいの方が良い気がする。

殴られたくないから絶対に言わないが。

てかあんなに食べてて体重増えないってどついう体のつくりしてんだ？

「平賀、やっぱり無理だったな」

カーペットでダウンしていた宮本が顔だけをこちらに向けてニヤリと笑った。

「なにがだよ？」

「さっき学校で言ってたこと。やっぱり無理だったじゃねえか」

学校？・・・あゝ、そういえば、

「言ってたなそんなこと」

「もう忘れてやがるし。最初っから直す気なんて無いじゃねえか」

「いやいや、最初はあったんだよ。ただ、もうやる気が無いだけだ」

「お前・・・まあいいや」

諦めたようにため息をついた宮本。それよりも、

「お前、もう飯食べたんだから帰れよ」

「そうだなゝ。あんまり長くいてシャルロットちゃんを怒らせるのもイヤだしなゝ・・・よし、帰るわー!」

立ち上がりながら宮本がそう言った。後ろからだからよく分からなかったけど、シャルロットが薄く微笑んだ気がした。やった！みたいな感じ。

「じゃあな。ごめんねシャルロットちゃん。後は好きにイチヤイチャしてていいから」

「……………うん」

「ああ、いいな、羨ましいな。シャルロットちゃん、平賀から俺に乗り替えない？」

「絶対に無い。私にはサイトだけ」

そう言って頭をグリグリと押し付けてくるシャルロット。宮本は四つん這いになって「ちくしょー！」とか言いながら床を殴ってる。  
……………カオスだ。

そして急に立ち上がると、フラフラと玄関に歩いていった。

「サイト、送らなくていいの？」

「ああ。てか今のアイツには触れないほうがいい」  
爆発しそうだ。

「そう」

しかし、それより俺には気になることがある。

「シャルロット。どうしてデルフを持って走ってたんだ？  
マジで斬られると思ったんだけど」

「私がサイトを斬るわけない。デルフリンガーを持っていたのはデルフリンガーに頼まれたから。出番が少ないからって。  
サイト、何のことが分かる？」

出番？何のことだ？

「いや、さっぱりだ。まあアイツはたまにおかしくなるから気にしなくていいと思うぞ？」

「分かった」

シャルロットにとってはデルフの話題はどつてもよかったらしく、  
すぐに興味をなくした。

「ところでサイト、テストはどうだった？」

また今更だな。一番最初に聞いてきそうな感じだけど。

「まあまあだな。たぶん部屋を別々にされないくらいには点数取れたと思う」

「・・・よかった」

ほっと一息ついたシャルロット。

「なあシャルロット、そんなに同じ部屋がいいのか？家一緒なんだから別に部屋が違っててもいけると思うんだけど・・・」

「ダメ。一緒がいい」

やっぱり譲るつもりはないようだ。まあ別に嫌ってわけじゃないからいいんだけだな。

とりあえず今日は土曜日に実践出来なかった怪談話を実行しよう。後の仕返しが怖いがそれを恐れてはダメだ！  
さて、どんな怪談がいいか。

そんなことを考えているあいだに、シャルロットが膝の上で寝てしまい、すうすうと寝息が聞こえてきた。動かすと起きてしまうのは間違いない。

なるべく体を動かさないようにしてシャルロットの顔を覗き込む。安心してしまった顔で体を預けるようにしてもたれてきている。襲われるとかなんて微塵も考えてねえんだろうな。いや、やらねえけどさ。ただ、理性を保つのがかなりキツイ。

まあいいや。テストも終わったし、俺も寝よう・・・。

「才人、宮本君は帰ったの？・・・って、また仲良く寝てるわね。邪魔しちゃ悪いし、寝かせといてあげましょうか」

気が付けば夜になっていた。俺もシャルロットも全く起きることなく寝ていたらしい。

慣れないテスト勉強で疲れが溜まっていたのか？

「お腹すいた」

シャルロットがぼつりと呟いた。

「昼飯たくさん食ってたよな？」

「宮本君が増えたから量が足りなかった」

そしてその日の晩飯は量がいつもより多かった。

それから特にすることもなかったので風呂に入ってねることにした。ちなみに今は10時くらいだ。今までなら考えられなかったけど、使い魔生活を一年間やってたから早寝早起きという、なんとも健康的な習慣が染み付いたみたいだ。

まあ今日はこれからが素晴らしい時間だ。怪談話でシャルロットを怖がらせてみようと思う。

「サイト、もう寝るの？」

俺の部屋に入ったらシャルロットがそう聞いてきた。

「いや、まだ寝ない。というかシャルロットに聞いてもらいたい話があつてな」

「私に？」

「ああ、頑張つて考えたんだ。聞いてくれるか？」

「うん」

嬉しそうに頷くシャルロットを見て軽く罪悪感にかられる。どんな話を期待しているのか知らないが、間違いなくシャルロットが想像してるのとは真逆だと思う。

「じゃあ始めるぞ」

コクンと頷くシャルロット。とりあえず心の中で先に謝っておこう。ごめん。

「よし。・・・それはちょうど雷雨の夜だった」

そして怪談が始まった。

「で、だ。いくら呼んでも出てこないそいつにしびれを切らした友達、ドアを開けたんだ・・・」

ここで一度間を取る。シャルロットは完全に固まっている。そして俺は最後の締めにかかった。

「そしたらそいつはいなくなっで、両側の壁に血でできた爪痕と大量の血溜まりがあっただってさ」

締めが終わると同時に外で雷が鳴った。・・・おかしいな、今日は晴れだったはずなんだが。

「シャルロット、どうだった？」

シャルロットに尋ねるが返事はない。気になって近寄ると、抱きついてきた。

「お、おい。シャルロット?」

シャルロットは震えていた。そんなに怖ったのか? まだまだ序の口  
なんだけど。

「そんなに怖った?」

シャルロットは涙目でうんうんと頷く。

ちよつとやりすぎたかな、と慰めながら頭を撫でていると、目の前  
に若い男がいた。ちなみに足はなくてふよふよと浮いている。・・・  
・は?

“ サイト君 ”

「 ヒイ! 」

“ 娘を泣かせるのは親としては許せないな。今度こんなことをした  
ら・・・分かるよね? ”

「 は、はい! すいませんでした! 」

“ 分かればいいんだよ。じゃあ僕はこれで失礼するよ。僕はいつで  
も二人を見ているからね ”

最後にそう釘を刺してその男は消えていった。

俺はただ震えていた。あんなの、怪談とは比較にならないくらい怖  
い!

俺の異常に気が付いたのかシャルロットが心配そうに覗き込んで  
きた。

「どうしたの？」

「い、いま、髪が青くて、足が無くてふよふよ浮いてる男の人が目の前に現れて『娘を泣かせるのは許せない』って言って消えていったんだ」

あの人ってまさか・・・

「・・・父様？」

「・・・やっぱり？」

あの人がシャルルさんか。想像通りめちゃくちゃカッコよかったな。俺とは比べものにならねえや。

「父様、他に何か言ってた？」

「俺達のこと、いつも見てるってよ」

「・・・そう」

嬉しそうに微笑むシャルロット。自分の傍に居てくれるのが嬉しいんだな。

それなら俺が怖い思いをしたのもまあいいかな、って思える。まあ、俺が見た幻っていう可能性があるけど。

“虚無に不可能は無いぞシャルル”

“すごいね兄さん。少しだけど実体化できたよ”

・・・聞かなかったことにしよう。

「サイト」

シャルロットの方を向くと、両手で杖を掴んでいた。

「あの、シャルロットさん？」

「怖かった」

これはもう逃げられないな。そう悟った俺は痛みに備えるために目を瞑った。

その後、平賀家にはゴンツ！という鈍い音が何度か響いた。

## テスト返却（前書き）

半年以上ぶりの更新。忘れ去られていないか心配です。

今回は後書きまで読んで頂けると嬉しいです。

皆さんの感想をお待ちします。

## テスト返却

Side 才人

「お、おお……！」

俺はテストの結果を見て震えていた。

「おつしゃあああああああ……！」

教室中に響くほどの雄叫びを上げた俺に、みんな（シャルロット除く）の冷ややかな視線が突き刺さった。

「サイト、大丈夫？」

俺の奇行を見て心配したシャルロットが声を掛けてきた。しかし問題ないぜシャルロット。むしろ絶好調だ！！

「そんなことよりシャルロット、これ見ろよ！」

「ん……！！サイト……これ……」

シャルロットが結果を見て少し目を見開かせた。

「学年、15番……」

「そうだよ！平均82点、15番。こんなの初めてだ！」

「……じゃあ」

「ああ、部屋を分けなくても済むぞ。」

そう、学年順位15番なんて今まで三桁の番数しか取ってこれなかった俺からすれば奇跡に近いのだ。これならば母さんも文句なしにOKだろう。

「……………やった。」

ぎゅっ、と顔を綻ばせたシャルロットが抱きついてきた。反射的に俺も軽く抱き返す。

「ありがとう、サイト。」

「気にすんなって。」

「…平賀、そういうの休み時間してくれ。」

仙石さんに止められてしまった。仕方ない。

「よしお前らー、期末テストも終わったし、2学期終わるまで自由だぞー。あ、赤点取った奴は当然補習なー。」

仙石さんの言葉な笑顔を浮かべる者、この世の終わりのような顔を浮かべる者と様々だ。チラッと横のシャルロットを見ると、嬉しいのか少し体がそわそわしている。

「そんなに嬉しいのか？」

「嬉しい。サイトやハルカと遊べる時間が増える。あと宮本君も。」

宮本、ついで扱い。ちなみにその本人はというと、机に突っ伏して

死んでいた。口から何かふわふわしたものが洩れ出して昇天しているが。

S i d e シャルロット

放課後、私とサイトとハルカはスーパーにいた。サイトのお母さんに買い物を頼まれていたから。今日の夕御飯は『すき焼き』というらしい。

「えっと、あとは…タマゴくらいか？」

「あと豆腐」

「おお、そうだったそうだった。」

「…シャルロットー、私を空気にしないで…」

後ろから腕を回して頭に顎を乗せてくるハルカ。動き辛い。

「自己主張しないと、読者には分からない。」

「シャルロット、何言ってるんだ？」

秘密。

「自己主張ならちゃんとしてるってー、ほらー。」

そう言って胸を押し付けてくるハルカ。………胸？

「むしろ自己主張してないのはシャルロットのほう……ってイタイイタイ痛い!!」

ハルカの手の甲の皮をひねる。加減はあまりしない。

「ごめんシャルロット！謝るから離して!？」

「ダメ、罰。」

「……自業自得だな。」

それから数分、ハルカの悲鳴が響いていた。

Side 才人

「「「「ごちそうさまでした。」」」」

ふう、すき焼きなんて久しぶりぶりだ。や、日本食自体一年ぶりなだけだな。

「シャルロット、どうだった？」

「満足、また食べたい。」

「ふふっ、好評そうで良かったわ。……ところで才人」

キラリ、と母さんの目が光った気がした。

「テストの結果、どうだったの？」

シャルロットと目を合わせた後、視線を母さんに戻す。

「……………」

「…え？ダメだったの？」

「……………15番！」

母さんがポカンとしている。

「……………マジ？」

「マジ」

母さんは俺が15番を取ったことが信じられなく、完全に固まっていた。あんた、息子のことをどう思ってた。テスト結果の紙を見せると漸く納得したようで、笑顔でこちらを見た。

「すごいじゃない、才人。…良かったわねシャルロットちゃん。才人と同じ部屋にいられるわよ。」

「（コクッ）……………嬉しい。」

本当に嬉しそうに頬を緩ませるシャルロットを見ると、頑張ったかいがあったと思う。…次同じことがあったら無理かもしれないが。

飯を食った後自室でダラダラしてたら食器を洗っていたシャルロットが戻ってきた。

「あ、食器洗い終わったのか？」

「うん。……………サイト」

「ん？何だ？」

心なし顔が赤い。

「……………お風呂」

……………一緒に入ろうってことか。うん、嫌なわけじゃないんだ。むしろ嬉しい。ただ、理性がいつまで保つか分からないんだよな。

「分かった、すぐに行くから先に行っててくれ」

「ん……………」

シャルロットがいなくなったのを確認して机の上のデルフを掴む。

「なあデルフ、伝説の剣」

「確かに伝説だがよ、急にどうしたよ元伝説。」

「お前…煩惱とか吸収出来るか？」

「…………………………は？」

心底意味が解らないといった感じの声を出すデルフ。

「いやほら、魔法を吸収するみたいになさ、煩惱を吸収したら少しは理性が保つかなーって思ってたさ。」

「無理だな。いくら俺が伝説つつつても、煩惱は無理だ。」

ため息（と思われる）をつきながら答えるデルフ。正直、期待はしていなかったが。

「…使えない伝説だ。」

「煩惱を吸収する伝説なんて嫌だぜ？ま、その伝説もこっちじやただの剣なだけだな。」

世知辛いねえ、なんてばやく伝説を放置して風呂屋に向かう。これ以上待たせたらシャルロットが怒る（拗ねる）かもしれないからな。

S i d e シャルロット

こっちに来てからサイトと一緒に風呂に入るのはこれで二回目。一回入ってからは何かと理由を付けて一緒に入ってくれなかったから。今日一緒に入れることは嬉しかった。

サイトの家のお風呂はそれなりに大きい。魔法学院の大浴場とは比べるべくもないけど、二人で入るには充分だ。

体にタオルを巻く。

手を離す。

ずれ落ちそうになる。

「……………」

自分の胸の絶壁具合に少しイラッときた。キュルケほど高望みはしないけど、せめて人並みくらい欲しいところ。何か良い方法でも無いだろうか。その時、ドアが開いた。

「悪いシャルロット、遅くなった。」

「胸が大きくなる方法、知らない？」

「へ？」

一瞬、何を尋ねられたのか分かっていなかったサイトは、質問の意味を理解した後、私の胸、そして少しずれたタオルを見て納得したように頷いた。

叩くべきかと思ったが、ここには杖が無い。残念。

「俺は知らないな。聞いたことあるのは大抵眉唾だしな。」

「……………そう」

この返答は予想通りだった。やはり、聞くなら女子に限る。ハルカに聞いてみよう。

「風呂、入るか？」

「（コクッ）」

S i d e 才 人

湯船の中で、俺の膝の上に座っているシャルロットの、タオル越しに伝わってくる感触と、女の子特有の甘い香りで頭の中がくらくらする。

「……………」

無心だ無心。何も考えなければいいんだ。考えるな、感じる！……余計ダメじゃねえか。

「……………」

あー、コルベール先生、煩惱を吸収する装置でも作ってくんねえかな。

「……………」

そんで、吸収した煩惱を電力に還元、名付けて『煩惱発電』……………ダメだ、どうかしてんな今日の俺。

「サイト」

「げふっ！」

みぞおちに肘を一発。容赦無いツス、シャルロットさん。

「聞いてた？」

「……………」悪い、聞いてなかった。」

「……………」（ムスッ）」

私、不機嫌です、というオーラを流しているシャルロット。わざとだとわかっていても焦るのは仕方ないと思う。

「ごめん、次はちゃんと聞くからさ、話してくんねえかな？」

頭を撫でると、シャルロットの不機嫌オーラが霧散した気がした。

「……………サイトは」

シャルロットの声が思っていたよりも真剣だったので、俺も真剣に聞く。

「……………サイトは、胸の大きさはどれくらいがいい？」

「……………は？」

真剣に聞いた俺が間違いだった。そう思う。

オマケ

「最近俺出番少ないねー。まあ、剣だからしゃーねえんだけどよ。」

剣であるデルフはいくらハルケギニア（向こう）では持っているのが普通であっても、日本ではそうはいかない。

場所によってはコスプレで通用するかもしれないが、基本的には銃刀法違反で即御用である。

「相棒もあの娘っこのことが頭の九割ほど占めてやがるから、ほとんど構ってくれねえし。」

故に剣は愚痴る。自分の扱いの悪さを嘆いて。

「デルフ君なんて良いほうだよ。私なんていつも『仕事でいない』状態なんだよ?」

ぶつぶつと文句を言っていたデルフの声を遮るように低い声が響いた。

「お、親父さんじゃねえか。」

勝手に息子の部屋に上がり込んでいるが、敢えて指摘はしない。というか、そんな空気じゃなかった。

「私なんて出番も少ないし、母さんにはお仕置きされるし、……何より! シャルロットちゃんとのスキンシップが少ない!!  
いつも才人と母さんばかり……たまには私もシャルロットちゃんを可愛がっても良いじゃないか!？」

「ダメだこのオッサン。もう手に負えねえ。」

デルフは早々に匙を投げた。

「デルフ君!!」

「あん?」

「革命だ!!」

「……………は？」

いきなりの発言についていけなかった。

「日頃の扱いが悪い私たちの待遇の改善を要求するんだ!？」

内容としては、出番の増加（共通）、会話の増加（共通）、シャルロットとのスキンシップ増加（父のみ）が主である。一部、変なところがあった気がするが、デルフは意図的にスルーした。

「話は分かったんだけど、いったい誰に要求するんだ？」

「ふっ、決まっているだろう?……作者にだよ!！」

「もうホント誰がこのオッサン止めてくれ……………」

こうして一人と一振りの身にならない会議は終了した。

続く……………のか？

## テスト返却（後書き）

父「というわけで、出番を増やしてくれ！」

作「マジで来やがったこのオッサン。……デルフ、しっかり止めてくれよ。」

デ「いや、無理だって。つか、書いてんのおめえだろうが。」

作「そりあまあ、そうだけだよ。」

父「ええい、ごちゃごちゃ言っていないで、出番を増やせ作者！！」

作「つつてもなあ…デルフは原作19巻のノリを使えば増やせるけど、親父さんは難しいんじゃない？」

父「なん……だと……」

デ「お、マジか？そりやありがてえな。原作様々だ。」

作「親父さんも、会社リストラされたってことにすれば出番増やせるけど？」

父「いや……流石にそれはマズイ。出番は増えるがその後がヤバイ（母さんのお仕置きの意味で）」

作「じゃあ諦めろ。」

父「まだまだ！！まだ終わらんよ」はいはい、サヨナラ」あっ、ち

「!.....うん、うん」

作「ふう、やっと帰った。あ、そうそう、今回は画面の前の皆にアンケートがある。何かやって欲しい学校行事やイベントがあればどんな感想に書いて欲しい。

あまり無茶なものでなければ大丈夫だ。期限は無いから気軽に書いてくれ。」

デ「別に学校行事だけじゃなくて、もう良いぜ。」

作「じゃあ、また次か」「エクスプロージョン」ギャアアアアア  
アアアアア！！！」

デ「作者アアアアアアアア！？」

「フハハ、見るシャルル、作者がゴミのようだ！」

「少しオーバーキルだったんじゃない？兄さん。」

続け！！

## 冬休み（前書き）

久しぶりの投稿、なにやたらと短い。現在、この『タバ日』の改訂中です。主な内容的には、呼び方をシャルロットからタバサに変わっている、というところですね。

次はもっと早く投稿できたらいいなあ…。

## 冬休み

「冬休みだヒヤッハー！」

「ヒヤッハー！！」

「遊びまくるぜヒヤッハー！」

「ヒヤッハー！！」

「テンション上がるぜヒヤッハー！」

「ヒヤッハー！！」

「俺補修だヒヤッハー……」

「ヒヤッハー……」

一部例外があるが、教室中に響く歓喜の叫び声。そう、今日は二期の終業式。明日からは冬休みである。そして我らが主人公、平賀才人も歓喜の声を上げる一人だった。

「今年は補修もねえし、遊びまくるぞおおお！！」

実は才人、補習がない長期休みなど高校に入って初めてである。テンションも上がるというものだ。

「さ～～い～～と～～」

「うおっ、な、何だよ宮本」

いきなり背後から現れた宮本に才人はびびった。はつきり言って幽霊か何かと間違えそうになった。

「このリア充がああああ」

ちなみに、宮本は今回もいつも通り補習組だ。宮本は虚ろな瞳を才人に向けながら、呪咀の言葉を撒き散らす。

「俺が知らない間に彼女作ってるししかもタバサちゃんマジ可愛いし風呂まで一緒に寝たりまでしやがってちくしょうちくしょうちくしょうしかもついには仲間だと思ってたテストまで良い点取りやがるし……………」

呼吸もせずにつぶつと何かを呟いている宮本を見て、才人は思った。これやバイ、と。

「あ、あのだな宮本——」

「平賀 ああああ……死にやがれええええええええええ！」

「宮本、うるさい！」

「グヘッ!？」

才人に殴りかかろうとした宮本は、ハルカの鉄拳で沈められた。死んではいけない。たぶん。

「容赦ないなお前……」

「助けてあげたのにその言い方はないんじゃない？」

「あー、うん、助かった、ありがとう」

「どーいたしまして」

軽口をたたきあう二人の間で倒れている宮本。誰もそれを指摘しない。こんなのはいつものことだった。

「それでさ才人、タバサを私の家に泊まらせたいんだけど……いいかな？」

席に座っているタバサを指差しながら聞いてきたハルカ。話を聞いてみれば、実は前々からタバサお泊まり計画は立案されていたようで、あとは才人の……というか、平賀家の許可を得るだけだったらしい。

「いいんじゃないか？行つてこいよ、タバサ」

「……………いいの？」

「ああ、楽しんでこいよ」

「……………うん」

正直、タバサとしては少しは渋って欲しかったというのはあるのだが、今更なので諦めた。

「やったわねタバサ！じゃあいつにしようか——」

女子二人は会話に花を咲かしはじめた。これに才人が入るのは無粋

だろう。才人は仕方なく、顔を下に向けた。

「いつまで寝てんだ宮本？」

「みんなが俺に優しくしてくれるまで」

「安心しろ、そんなのは一生ねえよ」

「……ちくしょう」

それもこれも平賀の所為だ、とぼやきながら宮本は立ち上がった。ちなみにハルカに殴られた痕など残ってうない。恐るべしギャグ補正、である。

「まあ、補習なんていつものことだからどうでもいいんだけどな」

「お前、補習さえサボったことあるよな」

「違う！あれは風邪を引いてたんだ！」

「その日、ゲーセンにいたって聞いたぞ？」

「……………バレてる？」

みんな知ってる、という才人の言葉に宮本はまた沈んだ。しかしそこは宮本。沈むのも早ければ立ち直るのも早い。

「スキー行こうぜ！」

「……いきなり何言ってたんだ？」

こいつ大丈夫か？と才人はわりと本気でそう思った。

「4人でスキー行こうぜ！まあ当然、補習がある日でもサボって行くけどな！！」

完全に言い切った宮本の眉間にチョークが突き刺さった。

「堂々とサボり発言してんじゃねえ」

そこには薄く笑みを浮かべている仙石がいた。ただし、目は笑っていないかったが。

「お前には少し説教が必要みたいだな宮本」

額に青筋を浮かべながら仙石は宮本を引きずって教室から出ていった。

「（お前のことは忘れないぜ……一分くらいは）」

才人は心の中で宮本に別れを告げた。そこに、宮本の話聞いていたハルカとタバサが近寄った。

「でもさ、補習のことはとかくスキーってのは良いアイディアだと思わない？タバサってスキーしたことある？」

「（ふるふる）」

ハルケギニアにはスキーという娯楽自体が無い。だから当然タバサも知らないのだが、それはハルカには分かるはずもない。

「んー、でも金がなあ……」

「あー、そっか……」

とりあえずスキーのことは保留ということになった。

「よしお前らー、HRすんぞー」

しばらくして帰ってきた仙石はスッキリした顔をしていて、宮本はしきりにごめんなさい、と呟いていた。

「いつ泊まりに行くんだ？」

帰り道の途中、才人とタバサは肩を並べて歩いていた。

「二日後に行く予定」

「そっか。じゃあ準備とかしとかねえとな」

「ん。………才人は私がいなくても寂しくない？」

それ、どっちかっていうと俺のセリフ。と才人は思ったが、口には出さなかった。

「心配ねえよ。……俺より親父の方が危なそうなんだよな」

私のタバサちゃんが！？とか言って発狂しかねない。どうしたものか、と悩んでいた才人だったが、どうでもいい事柄だったため、す

ぐに考えることをやめた。

「まあ、こっちのことは気にせずに思いっきり楽しんでこいよ」

「そうする」

嬉しそうに笑うタバサを見て、才人は心が暖かくなった。タバサもようやくこっちの生活にも慣れたようで、近所の人たちの顔も覚え始めているらしい。

「手、繋ぐか？」

「うん」

二人は微笑みながら家路へとついた。

「……聞いたかシャルル」

「うん、ちゃんと聞いたよ兄さん」

「二日後、シャルロットは出かけて少年一人だけのようだ」

「楽しくなりそうだね」

「フフフフフフ」

その瞬間、一人の少年は変な寒さを感じたとか感じなかったとか。

冬休み（後書き）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1318k/>

---

タバサと日本に帰ってきた

2011年7月18日13時01分発行